
極楽鳥花の花言葉

吟遊詩人 涼一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

極楽鳥花の花言葉

【Nコード】

N5262V

【作者名】

吟遊詩人 涼一

【あらすじ】

天界に祈るための芸術と、強い力を得るための魔術。

二つは互いに結ばれあい、人々は魔力なくして魔術を行使することができるようになった。

本当に手に入れたいものを探す人々が、最後に辿り着くのは何

はじまりのペガサス

絵の具はずいぶんすり減った。小屋の外ではしばらく雨が降りだして、不安は強くなるばかり。

彼女の隣で動く筆を見つめている妹は、しばらく肩に彩られた刺繍を気にしていた。

「私、もう本当に絵が描けなくなってしまったのかな……」

彼女の素肌に焼き印のように浮かぶ刺繍は、痛々しくも美しい紋様を持つ。

不安そうにする妹の頭を、筆を握っていない左手で撫でる姉。彼女の顔もまた不安げである。

「大丈夫、きっと呪いを解く方法があるはず」

姉はただそう言っただけで、また画板に向かい、白いキャンバスに色を重ね始める。青と白と、それからたくさんの明るい絵の具を、ゆっくり広げていく。雨音に彼女の筆は小さく震える。

ペガサスを描くのは、妹の油絵が適当だったが、彼女に絵を描くことはできない。

姉が絵画に嫌悪を抱いたのは、その夜が初めてだった。

山に隠れていることに下界の民が気づけば、彼女達は捕まってしまう。

そして、姉にも妹と同じように、絵を描けなくなる呪印を埋め込むのだ。

絵は、彼女らにとって、その人生の全てだった。

帝国は彼女らにその人生の終わりを告げるのだ。

その指に握られた一本の命でさえも許されないのならば、彼女はそう思う気持ちでいっぱいだった。

たとえ小さな力でも、あらがおう、戦おう、と。

雨がやむと、樹の葉もそよがず、虫も鳴かない林の道を歩いていく二人。妹は命を抱え、姉は人生を背負い。

樹の無い場所を見つけると、しばらく辺りをうかがう。

「……お姉ちゃんの絵、本当に飛べるの？」

妹はなおも不安げに尋ねる。姉は少し笑うと、画板を包んでいた布をほどいた。

とたん、月の明かりに触れた絵の中のペガサスの翼が銀色に輝いた。夜の闇の中に、真っ白な絵の具が舞った。蛍のような銀色の月の光が、絵画から解き放たれる。

全てが眠る林が、いつせいに生き返る。ざわめく木々。

二人の姿はたくさんの銀色の光に貫かれ、一緒に光になって夜の黒い絵の具の中に溶け込んだ。

くすぶる灰色は、強く光りながら、絵画の世界に落ちていった。

極楽鳥花の花言葉。

いつでも夢に見ている。

本当に大切な物を、

誰も知らない、この時に。

あおいひとみ（前書き）

空の上の

もつともつと

上の方に

天界があつて、

天界の反対に

鏡のように

魔界があつて、

二つの間に

人間が住む

人間界があります。

でも、みんな同じ

命です

みんな昔は

ひとみで世界を

見ていました。

そんな世界のお話。

あおいひとみ

王宮には国王と、たくさんの武器と、兵達。その間を縫うように進むのは、姿の見えないことをいいことに、我が物顔で王宮をゆく魔族の一員。

小さな鬼の子が、父親の手を握って言う。

「父ちゃん、どうしてこんな、人間の住むところに上がって来たんだ？」

父親は何も答えず、顔の前に白い人差し指を立てた。赤い顔をした小鬼は少し口をとがらせると、それから何も言葉を発しない。

魔界から現れた彼らは王宮を音もなく、玉座へと進む。

先頭で黒い皮のマントを翻す、魔王の使い。

その後をぞろぞろと続くのは、魔界の民。

警備する兵達には、彼らの姿は見えず、歩く彼らの足音も聞こえず、彼らの声も同じく。長い階段を最後まで上れば、上質な毛皮に腰をおろす国王の姿。

頬杖をつく王の右手の中指に、指輪の大きな石が青く光る。

王は玉座の間の赤いじゅうたんの先に、魔王の使いを見ると、目をむいた。

その恐ろしい容姿。もちろん人間とは大きく違っている。

死人のように白い肌、しかし目や鼻や口は人間の物と同じなのだか

ら、なお恐ろしい。

彼らの姿を見ることは、王にとって初めてのことでなかった。しかしそれでも、彼は体を突かれたように、体を震わせた。

「お久しぶりです、人の国の国王様」

魔王の使いは言ったあと、王の右手の光に目を留める。

「おや、これはこれは王様……青い瞳を、気に入っていただけたようですね」

王は指輪に触れて、小さくうなずいた。青い瞳と呼ばれる石は、熱を持って光っている。

「左様でございますか、となれば、王様」

魔王の使いの男は、じゅうたんの上を王に歩み寄り、王の耳にささやく。

「私達の願いを聞いてくださったということでございますね……国王様？」

目と鼻の先にある赤い目玉に、王の体は縛り付けられたかのように硬直した。

「あ、ああ、手は打った……」

王は少し不思議に思った。

悪魔は願いを聞き、魂を奪う。今王は、魔王の使いの願いを叶えてしまった。

恐らく、何かの代わりに。

「左様でございますか……魔界で待つ魔界の王も、さぞお喜びになるだろう」

不敵な笑みを浮かべる、それは正しく悪魔の微笑みであったが、願いを叶えたのは、王である。

「今夜はそれを確かめに参りました。この世界の未来はあなたの手にかかっておりますから……では、私はこれで」

彼はマントをひるがえし、玉座に背を向け、去ろうとする。

その後ろ姿は人間と変わらないものである。

そのとき王は確かに、魔族は人間であるという昔から伝わる迷信を信じ始めていた。

小鬼はまた父親に言う。

「父ちゃん、魔王の願い事ってなんだ？」

それを聞いた父親は、人差し指を立てると、にっこりと笑う。

「人間が魔法を禁止することさ。魔界の王様は、人間の魔法にとってもお怒りのようだからさ」

小鬼はよくわからないという顔をした。

それは彼にも彼の父親にもわからないことであつたが、大体二人の気に留めることではなかった。

「どうして人の魔法、魔王は嫌いなんだ？」

小鬼は少し考えてから、またそう尋ねた。

「当たり前のことじゃないか……魔法は魔族の物なのに、人間がそれを奪ったんだよ」

歴史の勉強はまだ早かったか、と思い直す父親。

「でも、人間は魔法をいいことに使うじゃないか？
魔族は悪いことばかり……」

父親は慌てて小鬼の口をおさえた。
それから列の先頭を歩く魔王の使いに聞こえてはいまいかと辺りを気にする。

「そんなこと大きな声で言うもんじゃない」

彼は小さな声で顔をしかめ、小鬼に言って聞かせた。
小鬼は真ん丸い目を小さく伏せると、また何も言わなくなる。

魔族の一味は王宮の兵の中を、透き通った体で歩く。
誰にも見えずとも、彼らは確実に、人間の世界に紛れ込んでいた。

一つ人間の国、その城下の町にはたくさんの人が住んでいた。
ただこの夜は、栄えた城下の色もなく、人々は明かりを消し、早々

に眠りにつく。

最近の国王と言ったら、全く何を考えているのかわからなかった。芸術の町として栄えたその城下町を、根から絶やすような命令を下したのだ。

帝国と呼ばれるその国であったが、国内に権力を握っているのは王であつたこと、今軍は徐々に解体されてきていること、人々は知っていた。

しかしその矢先、王は新しい国の規則を国民に訴えた。

それは悪法であるし、人々に理由も伝えられなかったので、人々は反対した。

もと軍国であることさえ忘れ……。

夜になると、町中の芸術家が城に集まった。

王の命令通り、全ての仕事道具を背負い。

広間に集う芸術家達はその道具を集められ、それから兵士の号令で整列した。

妻は夫を見送る。

冷たい夕方。鳥の鳴き声も聞こえないのだから、いるのはただ二人だけだった。

「これからどうするかは、後でゆっくり考えよう」

夫はそう言うと、娘が描いたいくつかの画板を背に負う。妻は静かにその姿をみつめている。

夕方の赤い日が、石畳の町を、並ぶ家々を、照らしながら時を伝える。

「俺も年だから、絵が描けなくてももういいんだ。若いときだったらごめんだけどな」

笑って見せるその顔に、いつも笑顔で返していたはずの妻は、沈んだ目のまま。

「そんな顔するな。死ににいく訳じゃないだろう」

夫の言葉に、妻は小さく首をふる。

「私達のかまいません。けど、あの子達が、心配で……心配で、たまらないのです」

二人はしばらく小さな声が聞こえるくらいに離れたまま、口を閉じる。

「……二人のことはもう、忘れよう。彼女たちはこの道を選んだんだ。あの子達にとったら、今の方が幸せかもしれない」

彼は言う、一つため息をつき、広場へと歩き始める。
妻は彼の背に目を留めたまま、空に祈った。

「どうか二人が逃げ延び、再び絵を描ける世界にたどり着けますように……」

男が城の広間に着くと、そこにはたくさんの芸術家。
集められた彼らの仕事道具の中には、画材、楽器、様々な物がある。
牛の皮の袋の中にがらくたのように放り込まれてゆく。

「全ての道具をここに」

兵士に差し出されたそのごみ袋の中に、男は娘の描いた思い出深い
絵を放り込む。

彼女らが小さな時から使っていた古びた絵筆も一緒に。

「それで全てか？」

兵は表情を崩さず、そう言った。

「ああ、全てだ」

男は言う、まるで捨てた絵を振り返ることもなく、周りでそれを見
ていた他の芸術家と同じように並んだ。

教会の集会のように集まる芸術家達は皆顔見知りであったが、誰一
人として口を開く者はいない。あいさつも無い。

誰の顔をとってみても、やはり納得のいかないようである。

「今日、皆様にお集まりいただいたのは、皆様ご存じの通りでございます」

突然、一番偉い兵士が演壇に立ち、合図するように太い声で皆に言った。

「今、王はこの国に、このようなご命令をくだされました」

とたん、前の方にいる一人の民が挙手する。

「私どもは、その理由を聞きに参ったのですが、知られるのでしょうか？」

それを聞いて群衆はざわめく。

つい一週間前に公布されたその禁則の理由など、確かに誰も知らなかった。

しかし、逆らえるわけなどないのである。

気付けば、広場のどこもかしこも、武装した兵だらけだ。

「お静かに」

兵は手の平を打ち、聴衆を静める。

「そのことにつきましては、これより国王様直々にお話がございませす」

そう言い、彼は広間の奥の扉の前に立つもう一人の兵士に目配せした。

扉の兵士はうなずくと、ゆっくりと扉を開けた。

その場にいる全ての人間が、現れた人間にひれ伏した。
もちろんどの民も、どの兵士も、例外ではない。

「おもてを……お上げください、皆様」

優しい王の声で、皆が顔を上げる。

皆の目に王は、以前町に顔を見せたときよりもずいぶん疲れているように見えていた。

「ここにお集まりいただいた皆様は、芸術の……力をお持ちということですが」

王は白いひげの中、その目で何かを追っているようだった。

「そんな皆様の力を、奪うわけでは、決して……ございませぬ」

皆王の言葉が真実であることを信じたかった。

しかし王の語りはまるで何かを隠しているようにしか見えず、その顔には汗が浮かんでいる。

「私達は太古の昔、天の国からこの力を、いただきました。天界に通じる手段として、天界の王は私達に美しいものを作り出す心と力を、お与えになりました」

王はしわがれた声で伝書を読み上げ、震える指で一つ書をめくる。

「そしてまた時同じくして、私達は魔界に通じる手段とし、魔界の王より魔術をいただきました」

皆声も発することなく、王の言葉を聞く。

次第に夕焼けは月明かりに変わり、城は灯された火に揺れる。

「しかし人は魔術を使うことは、ついにできませんでした。魔族の血をひかぬものは、魔力を持たぬからです」

魔術という技術を使うために、人は魔力を求めた。

「そこで、魔力を持たない人間を天界の王と魔界の王は哀れに思い、互いに相談し、魔界の魔術を天界の芸術に込め、人間にも魔術が使えるようにしてくださったのです」

男はその話を娘に毎日読んで聞かせていたことを思い出していた。

「人は魔術を生活の中に楽しみました……しかし、今となっては、どうでしょう？　魔術とは、たしなみ程度の物に成り下がってしまいました」

王のその言葉にまた、辺りがざわめく。

「魔術とは私達人間を今の今まで助けてくださった、大いなる力なのです。私達は、それを忘れ……魔界との交友の証であったはずの魔術により、互いの世界との隙間を広げているようであると……」

王の手はゆつくりと伝書を閉じた。

「全く、変な話じゃねえか」

男を慰めるように言う。

「じゃあ、魔界のお偉いさんは、俺達の世界の、魔術を返せと？」

城からの帰路、男は親しい隣人と出くわす。

ずいぶん落ち込んだ様子の男を案じているようだった。

「しかし、この頃人間界と魔界との仲が悪いのも事実だ。王の言葉は正しいのかもしれない」

男がそう言うと、隣人は声高らかに笑う。

かつては夜にも賑わっていた城下に響く笑い声は、今はもうない。

「冗談言っちゃいけないぜ。魔族と人間なんてもんは、前々から腐れ縁じゃねえか。それを今さら何言ってるんだ」

「おい、気を付けろよ」

男は隣人の言うことを遮る。

そして、向かい側に建ち並ぶ家々の中の一つを指した。

「最近この町は……まるで変なんだ。その家は王にものを言い
いったら、投獄されたらしい」

隣人は驚いたような顔をしている。

しかし男の娘などはこの町を出て今も逃げているのだから、投獄な
どでは済まないことはわかりきっていた。

「本当か……」

隣人は急に声を落とすと、顔を真っ青にする。

「ついに、軍国が戻ってくるのかな、予言通りに」

彼らの見上げた空は、月さえ見せず、ただぼんやりと雲を並べてい
た。

どこをめざして（前書き）

王宮の騎士に追われる二人は、深い森の中に隠れていました。

でも馬に乗った王宮の騎士はとても速くて、すぐに追いついてしま
いそう。

でも、もう一人、逃げる二人を見ている魔法使い。
彼はひそかに、二人に近づきます。

どこをめざして

トワルは静かに瞳を開く。

目に涙を溜めて、頬に涙を流し、小さく息を吐く。

その隣では彼女の姉が、寝息をたてている。

その日二つ目の宿泊小屋の中に、二人は一晩かくまわれることとなった。

トワルは右の手の平を顔の近くに寄せると、ゆっくりと息を吸い込む。

それは彼女のくせであった。

いつでも、その匂いが彼女の心を落ち着かせた。涙も上がる息も、すぐに沈んでいった。

しかしそのときの彼女の涙は、いつものようにぴたりとどまることはなかった。

彼女は涙を拭うと、姉を起こさないように小屋から出て、林の土の上に立った。

月の匂いに誘われたかのように見える彼女の姿を、風が優しく抱き取ると、また涙を誘う。

「お父さん……」

彼女がそうつぶやいたとき、彼女の父も、町で彼女の名前をつぶやいていただろう。

しかしその声に答える者は何もない。

彼女の目に映る風景は全て、大切な物になっていくのに、彼女の手は、もうその風景に命を込めることもできず、それを思うと、まるで何もかも彼女の力を待っているように見えてしまい、それが何とも言えない孤独感を生み出していた。

再び、肩に彩られた刺青のような呪印に触れれば、無力さを思い知る。

目の前の風景は待っているのに、彼女の手は届かない。

「トワル？」

呼ぶ声に、彼女は振り返る。

古い小屋の扉の前に、彼女の姉が立っている。

「お姉ちゃん、起きてたの？」

トワルはもう一度目をこすると、姉に向き直る。

「何してるの、こんな遅く……誰かに見られていたら、どうするの、捕まってしまうかもしれないでしょう？」

姉はとがめるように言ったが、その場所は都市から大分離れた山奥であったから、人が普通に歩いているようなことはないとわかっていた。

今にも壊れそうな、旅人のための小屋も、中に誰が何人いるのかさえわからないようである。

「ごめんなさい、でも、外の風景があまりにもきれいで」

姉はそれを聞くと、しばらく何も言わずに、その美しい風景を眺めていた。

しかしその風景は、どう見ても無造作に木が立っているだけのものにしか見えない。

「お姉ちゃん、やっぱり私まだ信じられない」

「何を？」

姉はわからないふりをした。

「絵が描けないって」

またしばらく、互いに黙り込む。

トワルは絵が描けないというのがどういうものか、今までそういうことがなかったから、わからなかった。

例えば、風景を見ても、何も浮かばないとか、そういうことだと思っていたのに、彼女の中には絵の構図までがはっきりと形を示していた。

「トワル、その呪いは、絵が描けなくなる呪いじゃなくて、魔法が使えなくなる呪いよ」

だからといってどうだというわけではなかったが、姉は落ち込むトワルにそう言った。

「でも私は魔法で絵を描いたときの方が楽しいもの」

冷たい風が吹いて、二人の体が震えた。

言葉と言葉は離れていく。

「……もう寝ないと、明日、逃げ遅れるわ」

「……うん、そうだね」

姉の言うことをよく聞く妹はうなづく。

また風が吹く。

二人は小屋の中に入ると、また眠る。

新しい世界へ向かうため。

ただ逃げなくてはいけなかった。

訳もわからずに、行く先もわからずに、ただ父の言う通りにした。

その日の父親はいつもとは明らかに違って見えた。

いつも優しく絵を教えてくれた、その父とは思えない、まさに鬼の

形相であつた。

芸術を使うことを禁止するという禁則が公布されたのは、執行の一週間前のこと。

ブランシュが市場から帰る途中、まだ朝早い町の広場にたくさんの人が集まり、群れをなしていた。

彼女はその中に父親がいるのを見て、何も気にならずにまっすぐ家に帰った。

家に待つ母にブランシュは、

「今広場が大騒ぎなのよ、何だかたくさんの人が集まって……」

そう言った。母が振り返ろうとするちょうどそのとき、大変な勢いで入り口の扉が開いて、父が帰る。

彼は顔面蒼白、ただ話しかけたブランシュやその母の声も聞こえないようで、扉を家の中に入ってきたその勢いのまま階段を駆け上がると、自室に入り何やら画材や絵の具をかき集め始める。

その様子を見た二人は驚いて、見たこともない父の様子を問う。

しかし父は何も言わずに、集めた画材を皮の背負い袋の中につめ、それを持ってブランシュに言う。

「これを持って、逃げるんだ」

そして父はブランシュや母に、その禁則について話した。

広場の掲示板に新しい法が定められたと。

その内容は芸術の禁止であると。

「でも父さん、どうして逃げる必要があるの？」

ブランシュは慌てたままの父に言った。

「お前に絵が描けなくなれちゃ、困るんだよ。ブランシュ、トワルにも。お前達は、絵が描ける世界に逃げなくてはいけないんだ」

父はそれ以上語ろうとはしなかった。ただ、逃げなくてはいけないという尋常でない父の激しい気持ち、娘に伝わっていた。

「しかし、お前の人生だ」

父は落ち着いたところで言う。

娘は何も口にせず聞いた。

「トワルにも、自分で選んだ人生を、歩んでほしい。ただ、ここにお前がずっといることはできない。それは確かだ」

なぜならば、ブランシュやトワルには絵がなければ、生きていけないからだ。

その人生を与えたのは父であるからして、彼はそのことをよくわかっていただろう。

彼女もその周りの芸術家達も、皆その法に疑問を持った。

しかし、学校の歴史の講習でならっていたようにその国はかつて、はつきりと軍が政治的権力を握ったことのある軍国。

今となっては、將軍家の末裔が王となり、しばらくは民主制をとっていたように見えたが、王宮の兵士達が持つ剣が誰に向けられているもののかなど、国の子供でも大体わかることだった。

中には父の言いつけと同じように、法が執行される前に町を出ていく者もいた。

しかし、町を出てもそこは王の配下、一度執行の日を迎えれば、たちまち王の手は国中に届いてしまうのだ。

逃げる理由を探していたブランシュであったが、こっそり城下を抜け出したり、王に物言いをして捕まってしまった人がいると聞くと、まるで城下は何かにとりつかれているような、そんな重苦しい雰囲気を感じとったようだった。

「父さんから引き継いだ魔術を絶やすのは嫌だ。私、トワルを連れて、逃げてみる」

父はそういう娘を見て、どのような道理があつてか、彼女に感謝していた。

「お前達だけでも、逃げてくれ……絶対に、捕まるんじゃないぞ」

そして、今でも、ブランシュには、曖昧でなかなか輪郭の見えない、ぼんやりとした理由しかなかった。

「私は、絵を描かなくちゃいけないんだ」

彼女が家を出るとき、彼女の父は言っていた。

「お前達の魔術が、人の先頭に立つまで、父さん達は、ずっと待っているからな」

彼女は妙な旅立ちを誓うと、トワルとともに、逃避行に出る。

今でも夢かうつつかしれないような小屋の中でも、本当に彼女達は二人きりだった。

トワルの体に刻まれた呪印が、ブランシュをも現実味の中に引き上げている。

父から渡された荷物の中には、しばらくの食糧と、金貨と、画材。そして、一枚の地図。

大陸が描かれた、世界地図。

王宮のある町からまっすぐ南に、赤い線が引かれていて、彼女達はそれをなぞるようにそこにたどり着いた。

ただ、絵を描くために、逃げるだけだった。

朝は静かに二人を見下ろす。

ブランシュは目が覚めるとすぐ、びんの中の水に絵の具を溶いた。
群青ぐんじょうの石を砕いて作る特別な絵の具だった。

水に浮かんだものを彼女が木の枝でかき混ぜてやると、沈んでしばらくきらきら光ってから、水と透き通るようになる。

そうしたら、晴れた青空に稲妻が走ったような青ができる。

「何の絵の具？ 絵を描くの？」

トワルはブランシュにそう言うのと、その青い絵の具を眺める。

「絵は描かないけど、きれいな絵の具だから」

「何で？」

「いいじゃない、なんでも」ブランシュはしっかりとびんを封じて
鞆たもとの中にしまうと、それを背負う。

「行こう、追いつかれちゃうよ」

姉が小屋の扉を出ると、動物の子供のように妹もついていく。

明るく冷たい太陽に浅く照らされた林は、月明かりの夜よりも幾分はつきりと見え、遠く霧がかかった向こうにまで緑が広がっていて、その中でただ二人でいる彼女達に恐ろしさを教えた。

「あの人、私達の顔、覚えてるかな？」

トワルの言うあの人というのは、彼女達を追う王宮の騎士のことである。

姉の手を握る。

「トワル、いつからそんなに怖がりになったの」

「だって……あの人、馬に乗ってるんだよ、とても速かったし、剣もあつた……」

ブランシュは聞きながら考えた。

騎士はブランシュとトワルの顔を覚えているに違いなかった。逃亡しようとする芸術家達が小屋にいるということを騎士達は大体わかっていて、逃げる道を先に回って、捕まえようとしているように見えた。

「きつとこの小屋に私達がいること、もう知ってるよね」

トワルは小屋の扉に打ち付けられた鉄の板を指差す。

鉄の上には文字が刻まれていた。さびついてほとんど消えかかっていたが、少し指でこすってやるとよく見えた。

『たびびとのやど』

きずついたからだに

ひとときのやすらぎを

みなみ22ばんごや』

南22番小屋、小屋にはそう名前がつけられていた。

「昨日お姉ちゃんが絵を描いていた小屋は、21番の小屋だった。20番の小屋の外であの人に見つかったんだから……きつと、小屋を一つずつ、見てるんじゃないかな……」

「でも、ペガサスに乗ってここまで来たの。大分離れてるはずでしょう?」

姉は安心させるようにトワルに言った。

それでも妹は心配のままにいる。

「もうすぐ町があるの。小さなところだけど……そこまで行ってみよう。あそこに、私達のことを知っている人がいるって、お母さん言ってたから」

ブランシュはトワルの手を握ると歩き出す。

トワルは今にも泣き出しそうな顔をして、仕方がなく歩き出した。

21番小屋から少し離れて広がる獣道には、物が燃えたあとの灰が一つ残っていた。

「これは魔法のあとに残るものでございます」

青白い肌の男は王宮の騎士に言った。

「なんというものだ」

「魔術痕まじゅつこんにございます」

騎士はそこにかがむとその魔術痕というものをよく調べた。その姿を男は後ろからのぞき込む。枯れた茎のような体に、血も流れていないような白い肌、それも魔界の民のように見えた。

「そうか、絵を使って遠くに行くのを見たことがあるぞ……あの娘達はこれで逃げたのだな」

騎士は満足げに笑いながら、ささやくように言った。

「あれはどこまで飛べる？」

「そう遠くには行けませぬ、何しろあの術師は子供でありますから、それほどの力はございませぬ」

魔族らしき男が言うと、騎士はゆっくり立ち上がり、停めていた馬にまたがった。

「では、お前の力をもう一度、見せてはもらえぬかな」

騎士はそう言うと、馬の上から見下ろす。

「ええ、参りましょう」

騎士に従える魔術師は、長い裾から針金のような腕を出し、両の手の平を天に向ける。

それから小さなまじないがちらちらと飛ぶと、瞬間に強い光とともに彼らは姿を消した。

ずいぶん歩いたところ、トワルは先に行くブランシュの手を引いた。

「もう歩くのやだ」

トワルは小さな声で言うと、繋いでいた手を離し、そこに立ち止まったままでいる。

もう樹と木の葉の向こうは、小さく赤くなってきた。二人は朝から歩き通しである。

「じゃあ置いてくよ、いいの?」

鳥の鳴き声が一つ響く。

「嫌だ! 嫌だけど、もう……」

トワルはその場に腰をおろした。

「私は魔法が使えないんだし、逃げてても意味がない……お姉ちゃんだけ逃げれば、私は邪魔にならないから」

ただ逃げるだけだろうか。

ブランシュは考えた。

彼女は不思議でたまらなかった。

描きたい、絵を描いて生きたいと思っていた。

小さなときからずっと彼女の夢だった。

絵画の世界は彼女を魅了した、彼女は魅了された。

今思い返してみれば、はじめからおかしな話であった。

父は獣に言葉を教えることができたらしかった。

誰に尋ねても知らないような絵の技術を、まだ何の分別もつかないような幼いブランシュに教えていたのだ。

また不思議なことに、ブランシュは父に言われたことを淡々とこなした。

そして、訳もわからず、目的もあやふやなまま、道を急いでいた。また不思議なことに、そうなることを昔から知っていたかのごとく、彼女はただ逃げるだけの日々を受け入れる。

日々はなぞなぞ遊びつきの絵本だった。

彼女の父も、彼女自信でさえも、謎めいていた。

だから彼女は、訳もなく逃げることを当然のことのように受け入れられるのかもしれない。

「もともと逃げる意味なんてなかった。トワルがもしまだ魔術を使うことができて、私達に向かう場所なんてない……」

トワルは初めて、姉のことを恐ろしく思った。

何を言っているのか彼女にはわからなかったが、そう言うブランシユの手は、トワルに差し伸べられていたからだ。

トワルはゆっくりとその手を握った。

「どこも目指さず、逃げるしかないなら、今はせめて歩くしかないから、ね」

ブランシユがそう言うのと、トワルは静かにうなづく。

また二人は互いの手を取り、歩き出す。

しかし、誰が彼女達に向かい風を吹くのか、彼女達が騎士の馬のひづめを耳に聞くのは、そのすぐあとのことだった。

草むらに隠れ、息を殺す。

「どうしても追いついたのかしら……一晩で着くほどの距離じゃなかったんだけど……」

姉は妹の背を強くなく押して、草の中に身を小さくさせた。

「もしかしたら、あの人もペガサスを描けるんじゃない？」

妹は姉の顔を見上げて言った。

ひづめは間隔を埋めていく。

「まさか、だって禁則は昨日執行されたのよ。王宮の兵士が、芸術を使ったりしたら……」

ブランシュはとたんに声を飲み込んで、草の中に体をうずめた。
木々の向こうに騎士の緋色のマントが見えたからだった。

逃げていると一度知られてしまえば、二度顔を合わせる訳にはいかなかった。

二人は草の下から様子をうかがった。

ひづめの音が消える。

もうすぐそばに、馬の姿があり、その背の上で辺りを見渡している男が、彼女らを追う王宮の騎士であった。

「ここらに逃げてきていたようだが、どこに隠れたのか……」

騎士はつぶやく。

「お姉ちゃん……」

真剣に様子を見ていた姉の手を、妹の手が握る。

「大丈夫、大丈夫だから……」

ブランシュが震える声で言った、そのとき、森の中の三人の耳に、
他と違うものが入り込んだ。

突然のことに姉妹は動きを止めた。それは何か弦の音色らしく、高く明るい、心地の良いものであったが、その場所にこだまする音に限っては不気味に聞こえた。

悲しげな旋律が辺りを包み、しかしその音は己の場所を語るようにはっきりと森の向こう側から聞こえていた。

愚かな芸術家だ、と思った王宮の騎士は、すぐに馬を従えて、今来た道を走っていく。

森はそのあともしばらく、豊かな音色が満ちていた。

「今の、何？」

その器楽が聞こえなくなったとき、トワルは絡みつく草から脱すると、王宮の騎士が向かっていった方向を眺める。

馬の足音は遠くへ流れ、消えた。

「楽器の音だった……芸術家かしら……」

ブランシュはその弦の主の身を案ずる。もしもそれを探す王宮の騎士に見つかってしまえば、とらわれてしまうからだった。

「でも、こんなところに人がいる？」

トワルが姉に問う。

ブランシュが何か口に出そうとしたとき、また唐突にその音色が沸き立った。

彼女達が身を震わせたのは、その旋律が次には頭の上から聞こえてくるからであった。

降り注ぐ弦のこだまは二人の体に突き立てられた。

二人が音色を仰ぐと、それに合わせて旋律は余韻を残しつつ姿を現した。

大きな樹のまたの上に片足を垂らしている男が、彼女達を見下ろしていた。

腕の中にきらきら光るたてごと豎琴を抱いていて、彼女達がそれに気づくと、彼は嬉しそうに笑った。

あたらしいみち（前書き）

道に迷うと、なんだか怖い。

もうずっとおうちに帰れないみたいです。

でも、みんなおうちに帰る。

迷うより、その道より、それが何よりふしぎなことです。

きつと新しい道が、導いてくれるのでしよう。

ふしぎで、きみようで、もしかしたら足もふみいれたくないような、

新しい道が、開けるのでしよう。

あたらしいみち

馬の上の騎士の耳にはずっとその音が残っていて、彼は森の中をそわそわしながら走っていた。

「よしよし、そのままうかれて奏でておれ……これは早私の手柄ではないか」

早く捕まえて王宮に持っていけばきつとほうびをもらえるだろうと思つて、騎士は目を輝かせる

旋律が流れてくるのは、その樹の並んでいる向こう側であつた。馬を止めると、辺りを見渡す。しかし、そこには誰もいない。

「むむ、どこに隠れておるのか……そうだ、ソワ、見えるか？」

騎士は一人でいるように見えたが、誰かと何かを話している。

「そうか、見えぬか」

しかし、すぐそばで音は聞こえている。馬の足を止めたとき、まさにその音色は騎士の体に見えぬ糸をかけ、その先に惹き付けているようであつた。

その良い音色にしばらく陶醉して、我に返るときにはすでに彼は馬を降りて音の導くままに足を運んでいた。

「その樂を奏でる者よ、早く姿を見せぬか……」

彼は次第に深い霧の中に入っていった。響き続ける音色を追い、そろそろ馬の目にもその主が見えなくなった頃、騎士の叫びが森にとどろく。

その声は次第に小さく遠くなっていった、本当に彼の姿は霧の中に失われてしまったように見えた。

また、これは馬の心中、騎士をしばらく心配しながらも、後をつけることはなかった。

その先に谷があることを知っているかのよう。

その男は樹の上から笑顔のまま少女らを見下ろし、もう一度弦を鳴らす。

また美しい響きが葉を揺らす。
ブランシュには全くと言って良いほど音楽の知識はなかったが、その柔らかい音色は、教会でたくさんの方が寄り合い歌っていた聖歌のように聞こえた。

「やあ、おはよう」

元氣にあいさつを囁きましたのは、その男だった。

何しろ、その男は無邪気な子供のように見えたため、樹の上からあいさつをされても二人は何とも思わなかった。

しかし彼の姿は木登りをする歳とは思えるものではないのだが。

「お姉ちゃん、誰あの人？」

トワルの声に、啞然としていたブランシュが目覚める。

トワルは明らかに不審に思っている。

「わからないけど、怖い人ではなさそうだから……」

ブランシュは妹に向かい小さな声で言う、樹の上の男に目を戻した。

につこり笑って、片足をぶらぶらと枝の下に出して揺らしている。

確かにその姿は、普通の人には見えない。

「先程はどうもありがとうございました」

ブランシュは頭を下げた。

樹の上にいる人と話すのははじめてのことだったから、ブランシュは少しぎこちない。

「いやあ、何。それより君たち、どうして追われてるの？　どんな悪いことしたんだい、さっきの馬は、王宮のやつだろう」

男は笑顔で言う。

ブランシュは言葉を失った。芸術が禁止されている国内でこれほど

まで堂々と、音楽をかなでているのだから。悪気もなく。

「実は私達、芸術を父から受け継いでいて」

「へえ。どんな魔力？」

彼女らが罪人であることは、全く気にしていない。しかしそれはよく考えれば当たり前なことかもしれない。

彼も芸術を持っているのだから。

男は布で豎琴を包むと、それを麻の紐で鞆に結び付けた。

そして流れる水の速さで彼女たちのもとまで樹の幹をくだる。

そのほとんど飛び降りたような身のこなしにトワルは目を見開いた。そして、ブランシュの後ろにさりげなく隠れるようにした。

「絵画です。私は水彩、この子は油彩」

ブランシュは言ったあとトワルの顔をのぞいた。その目は伏せている。

「今は、魔法は使えないのですけれど……」

男はそれを聞いてもやはり笑顔を絶やさずに、隠れるトワルに近くとその細い肩にある呪印をうなずきながらよく観察した。

それから一層目を三日月に近づける。

「これは大変だったね」

トワルは小さくうなずいて、それからそのまま恥ずかしそうにそっぽを向いた。

「おいおい、せっかく助けてやったのに、それはないだろう？」

男は冗談混じりに肩をすくめる。

真っ白いシャツに、良さそうな布のズボン、まぶしいような金色の短い髪は美しく、どれをとってみても質の良い暮らしを送っているように見えた。

しかし彼の背負う袋は、金のない旅人の背にあるものとよく似た麻布であり、所々すりきれて穴もあいている。

「それにしても、危なかったよ。僕がいなかったら、君たちは捕まっていた」

彼は腕を組んで、少し低い声で言った。

それから、眉間にしわを寄せると、咳払いを一つ。

「王宮の騎士を使って君達のような女の子を追うだなんて。僕も危なかったよな、いつもだったら、あいつの思う通りに捕まっていたよ。さっきは君達が走ってきたから気づいたんだけどさ」

彼はそう言うときまた冗談を話すときのように笑う。

いつもだったら、ということは、彼はよくこの森の中にやってくるということのようだった。

「まあ、お互い助かったんだから良かったよ。じゃ、気をつけてね」

男はそう言うとき、歩き出す。

ブランシュはその背にもう一度礼を言うと、彼の行く道とは反対に歩き出した。

彼も芸術家だが、これからどうするつもりなのだろうか、と人の心

配までしていたブランシュであったが、少し歩いて、すぐにその足を止めた。

トワルが辺りを見回してから、姉の服の裾を引いた。

「ねえ、ここどこ？」

「さあ、どこだろう」

二人は騎士からしばらく逃げているうちにずいぶん遠くに来てしまったことに気がついた。

そして、何かさがるような気持ちで、木々の中に消えていきそうな男をふりかえるのである。

「おかしい……おかしいぞ、ニューイ……」

暗い夜、と言ってもこの世界には夜しかないのだけれど、もしもその闇を表現するのならば、暗い夜という言い方が正しいように思える。

魔界の王は黒い巢窟の中で透明な壺を見て言う。
その中には瑠璃の玉か宝石かと思紛うほどの美しい真ん丸の結晶が
つめられている。

「この中にはあの強い魔力が感じられぬ……」

その闇の中でも黒く輝く魔王の瞳は、巢窟の中から外にいる男をに
らむ。

カーテンのように闇のベールが垂れ下がり、王の周りを風に従うよ
うに揺れている。それが魔王の巢窟である。

その先には他の者は立ち入ることができず、魔王の姿すら目に映す
ことは許されない。

しかし、魔王が従えているその男には、近づく権利が与えられてい
た。

「恐れ入りますが魔王様……確かに聖地であるあの国の都からは、
強い芸術の力を感じることができました……しかし、人の国の王ロ
ワからその力の結晶を受け取ったときにはすでに力は消えておりま
した。恐らく……逃げられたかと」

ニューイと呼ばれたその男の声は平淡で、いかなる感情も感じとるこ
とはできない。

王にひざまずいて言うのは、紅く燃え上がりそうな唇、王の言葉に
傾けるのは、白くとがった耳。

どれも人と紙一重の容姿であるが、その微々たる違いが寄り集まり、
人との違いを顕著なものとしている。

「逃げられたか……」

魔王はため息混じりに言った。しかし憤りは感じられない。

「……お前ならどうする……ニユイ」

ニユイはそれを聞くか聞かないか、わからないほどの瞬間のうちに答える。

「ご安心ください魔王様。手は打たせました。その国でも有能な魔法剣士に追わせていると、人の王は吐きました」

王の怒りに触れないうちに話を済ませようとしたニユイであるが、やはり彼の言葉に感情はない。

「手は打たせた、だと？」

王は一層感情を潜めて言った。

「よくしつけた使い魔を従えていたのにも関わらず、お前は人に人を追わせたというのか」

「いえ王様、そのようなことを起こしてしまえば、天界が黙ってはいないでしょう。これは私の打算の結果でございます」

ニユイはしばらく口を閉ざしたままの魔王の、巣窟の奥にあるその黒い瞳だけを見つめて、笑顔を浮かべた。

赤い唇が白い頬を裂く。

魔王はしばらく口を結んだまま、闇の中に溶け込んでいた。

「もしもあの大きな力の存在によって、私達のこの戦況が危ぶまれるようなことになれば、ただではおかない」

また息を混じらせた魔王の声。

瞳は闇の奥で静かに笑みを持ち、そこから手を伸ばす。

魔王の肌は水から上がったばかりのような銀色のうろこに包まれていた。

「承知いたしました、魔王様……」

ひざまずき頭を下げた彼の白い頬の上をうろこの指が滑る。

そのとき初めて、顔をしかめた。

彼らは永遠の夜に生きていて、それでいて永遠など知らない、生きることとはそういうことだという、漠然とした観念を持っている。それを人間が知ったなら、どんなことを言うだろう。

人は悠久の時の中を絶えず生まれて生きているけれど、永遠などあり得ないと、生きることとはそういうことだという、これもまた漠然とした観念を持っている。

自らを包む永遠に気がつかない、それこそ、人が日々いかに自己に没頭しているかの証明ではないか。

と、魔王はよく思う。

「お姉ちゃん、今なんて言ったの？」

「一緒に逃げる」

「それ、どういう意味なの？」

「だから、一緒に逃げるの、都から」

「何言ってるのお姉ちゃん、気は確かなの？」

「確かも何も、だって絵が描けなくなるのよ、嫌でしょ」

「でも、逃げたりしたら、どうなるの？」

「鬼ごっこよ。泥棒が兵士の馬に追われてるの、あなたも見たことがあるでしょう」

「だって、私達泥棒じゃないわ、捕まったらどうなるのよ」

「きっと、禁じ状に書いてあった通り、幽閉の刑ね」

「いや、そんなの。そこまでして絵が描きたいの、お姉ちゃん？」

「いいえ、私だって閉じ込められるなんて嫌だけど、逃げればいいのよ。そうすれば、また絵も描ける」

「捕まるに決まってる！ 私、馬と鬼ごっこなんてしたことないもの」

「何、私が馬と鬼ごっこ、したことあるとでも言いたいわけ」

「嘘、お姉ちゃんそれ冗談のつもり？ とんでもないわ」

「一応、真剣な話よ。お父さんがそうしなさいって」

「パパが……？ ここから逃げてお馬と鬼ごっこして遊びなさいって？」

「あなたこそ冗談過ぎるわ。お父さんは怖い顔して言ったのよ。逃げろ！ ……って」

「まさか、パパのうまい冗談でしょう？」

「お父さんは冗談言わない」

「冗談じゃなかったら、何？ お姉ちゃん、冗談の他に何か思いつく？」

「真剣な話ってことよ」

「何それ、冗談でしょ？」

「冗談じゃないわ、私も冗談は嫌いよ、お父さんに似て」

「私だって冗談なんて好きじゃない、お姉ちゃん、絶対に馬と鬼ごっこなんて、しちゃだめよ」

「もう、出発する日だって決まってるから。お父さんにも行くって言っただし」

「出発する日？ 冗談だってわかってきくけど、いつ？」

「今日。言っておくけど、これも冗談じゃないわ」

「今日！ だって、さっきお家でパパ、何も言っていなかったじゃない」

「トワルにはあまり言わない方が良いかもしれないって、お母さんが」

「ママも知っていたの？ じゃあ……二人とも私達に出ていってほしいの？」

「ええ」

「お姉ちゃん、真剣な話よ！」

「だから、真剣に答えたじゃない」

「全然、真剣に見えないよ……お姉ちゃん、そんなことパパに言われて、嫌じゃなかったの」

「そんなことって？」

「だから……絵を描くためにここから逃げなさいって」

「そうね、トワルは嫌なの？」

「嫌に決まってるよ。だって、そんなの、パパじゃないみたい」

「だからなおさら、信じちゃったのよ。いつもみたいに優しく言われたら、私だって言うわ、冗談でしょうって」

「どんなふうに言われたの？」

「私達に絵を教えるときみたい」

「……お姉ちゃん……」

「だから、お父さんは、絵を描く私達が好きなの。わかる？」

「……じゃあ、私達が必要じゃないみたい。パパには私達が描いた絵だけあればいいということ？」

「本当にそんなこと、思ってるの？　お父さんは、私達のためにこう言ってくれてるの」

「私達のため？　……違うわ、パパのためだわ」

「違う、お父さんは私達のために言ってくれてるのよ。だって、お父さんは私達の絵をいつも楽しそうに観ているでしょう。私達にもっと、絵を描いてほしいのよ」

その日の夜に、二人は父や母に見送られることとなる。

妹の涙に、姉の乾いた頬。

ムジクという名前の男は二人の前を歩いていて、ときどき気づいたことをよく話しかけていた。

一人、樹の上にいたわりにはずいぶん人懐こいものだど、姉も妹も思った。

だんだん朝の光は金色に木の葉の間を透き通ると、彼らの足元を泳いでいる。

時間はゆっくりと温かくなっていくよう。

「まっすぐ南と言えば、ボーエの町さ。行ったことはあるかい？」

ムジクは渡された地図を見てそう言うと、城下から伸ばされた赤い道筋をなぞる。

「母がそこに行くようになって言ってた……その地図は父に渡されたものだけだ」

「そうか、それじゃあそっちに逃げるしかないな。まあ……あの町が今どうなってるかはわからないけど」

王宮からは法の執行の一週間から隣町に向かって伝書がだされていた。たくさん馬が出され、他の町や村にも法が伝えられるのである。

だから、法の執行された今、隣の町でも芸術は使えない。

「だから僕はずっとこの森に住んでいるんだけどさ」

姉妹は顔を見合わせた。もちろん驚いた。

「どこに逃げても僕達は追い出されてしまう……」

彼が初めて声を落として言った。

「ほら、逃げる芸術家達がいるだろう？ 彼らもそのまま、各地を転々とするんだって」

「逃げ続けるということですか？」

ブランシュはきいた。

隠者と旅人が王宮に訪れることはなかったけれど、二人は本で見たことがあった。

ブランシュはそんな人達を普通じゃない人達だと思っていた。でも、今にしてみれば彼女たちも同じようなものだし、馬と鬼ごっこしていることをつければもっとおかしいことだった。

同じ人間だと。

「だって世の中から逃げて隠居するほどの力はないからさ……まあ、せいぜいそうやって逃げるしかないよ」

彼は笑う。

絵を隠しながら生きるなど、果たしてどんな意味があっただろう。ブランシュはゆっくり昇っていく太陽を感じながら、そう考えていた。

「でも、どうして君達のパパは、君達を送り出したと思う？」

声は明るかった。

「僕が君達のパパだったら、まさか二人とも馬と鬼ごっこしてこないって言わないよ。特別な理由がなければ」

トワルは姉の手を強く握ると、殻を破った。

「特別な理由って何？」

ムジクはその声に振り返ると、にっこりと笑う。トワルはまた姉の手を強く握り、そっぽを向いた。

「君達が、逃げなくてはいけない理由さ。きっと、いつかわかると思うよ」

ブランシュは彼の笑顔を見ながら、ぼんやりとした霧の中に迷い込んでいった。

彼もまた、彼女や彼女の父と同じように謎めいている。

彼は森を隣町まで導いてくれると、そう言ったはずだった。そのかわり、また新しく森の中に霧をかけた。

見知らぬ人をなぜ信じることができたのか、と誰に問うわけでもなく、そして誰が答えるわけでもない。

しかし何かそれようのない道の中に迷い込んでいく自分を、まるでその道の深みへ導いているような誰かに、任せてしまっている自分が、誰よりも謎めいている。

と、ブランシュは思った。

パパのいうこと(前書き)

不思議な大きな力が、迷い路を救ったように

決められた路の上を歩くことができて、分かれ道もあるようですが

あまり気づくことはありません

パパのぐういふ

窓の外には星がまたたく。

その前を家々の煙突から吐き出された雲が行き過ぎた。その風景は逃避行には似つかわしくはないけれど、彼女らにしばらくの休息があるのは確かだった。

小さな宿の二階には絹布の白く磨かれた寝台だけが二つ置かれていて、ほんの銅貨五つの格安で泊まることができるその訳を物語っている。薄ぺらい寝台の他に目につくものといえば、歩きたびにギシギシと鳴る隙間だらけの板張りの床くらい。とはいえ、誰も贅沢は言えない訳だし、それをとにかく言う者はないわけで、だから贅沢をしたい者はより大きな宿を借りるのである。

トワルはベッドの上に倒れたまま動かなくなってしまった。

「ずっと歩いていたらね。疲れたんだろう」

音楽家がそう言うのに画家は何も答えなかった。答える必要もないだろうし、また答える気力もなかったためである。

町はとても静かだった。大きな町というのは夜も人で賑わっているものだと画家は考えていたが、しかしそこは都よりもうんと静かだった。

「見たかい、さっき兵士が人を捕まえてるの。あれは僕達と同じ、芸術家だよ」

「じゃあ、もうこの町でも芸術は禁止されてるんですね」
もちろん彼女は恐れていた。

「この町？ まさか。もう国中さ。この町にだって、欠けている」
それから、顔に浮かべたままだった笑みを真剣に閉じ込めると、音楽家は画家の目をじっと見ていた。

画家は「何が」とは訊かなかった。それを口に出したときには、自分まで芸術を使えなくなってしまうているようになるからだ。

芸術を使うというのは妙なことかもしれないけれど、それを禁止する法とはさらに妙なものである。しかも国民はその訳を知らないのだから。画家はそれでも特に不思議に思わなかったし、前にも思った通り馬と鬼ごっこをするのは遙か昔から決まっていたような気がしていたため、そんな自分やそれを喜んで送り出す父や母のほうが余程不思議だった。

それから画家はふと気がついた。

「そういえば、道を案内していただいたのですよね……」

音楽家に言ったあと、彼が森に住んでいるというのを思い出す。何だか札を言い難い気がしていたのは、そのためである、

「そうだった。僕すっかり忘れてたよ」

彼は一つの寝台に置いた荷物に手をのせる。

「あ、もしかして森に住んでるって話、本気にしてる？ まさかしてないよね」

笑いながら言う人を見ていた彼女は、信じていたなどとはとても言えなかった。ではどこに住んでいるのか、なぜあの森にいたのか、などとたくさんの言葉が口を突いて出そうになるものの、笑ってごまかせたようにしているのが精一杯であった。

二人が談笑しているところ、店の店主が階段の下から二人のことを呼んでいる声がした。

その宿場の店主というのは年を取り干物のようになってしまった老婆で、その宿にはたったのその老婆一人しかない。

「何か？」

音楽家は階段の下ですぐそばにある玄関にいるであろう老婆に声を送った。何分小さな宿屋であるから、そのようにして話をする事ができるらしかった。

「お邪魔して申し訳ございませんね。今お役人がいらして、怪しい者が増えているから、夜道は気を付けるようにとありましたから」店主の声ははっきりしている。その歳の外見からはとても思えないくらい、元気なのだ。

「ああ、そうですか。ありがとう」

音楽家は明るい声で言ったあと老婆の声が聞こえなくなるのを確かめて、肩をすくめた。

「僕達のことかな」

僕達、というのは逃げる芸術家達を差すらしい。その部屋にいる三人も、逃げる芸術家。

画家は目を伏せたまま何も言わない。ただ、彼女にとってはそれだけのことで、向かいのベッドの上に腰を下ろしてそれを見ている音楽家には、彼女は岐路を目前に力尽きた旅人のように見えた。「何か気になることがあるのかい、それとも……もう答えるのが面倒になってきたのかい」

「いいえ、そんなことじゃなくて……ただ、何だか、私本当に自分が悪いような気がしてならなくて……」

芸術家が芸術を禁じられ、それに抗うことを悪いと言う者は、大体辺りには少しもいないようだった。だから彼女は逃げることは罪ではない、と思いたかった。

しかし、悪法もまた法、破れば他の「怪しい者」達のように捕まってしまうのである。

「どうして？ 理由も伝えずにもう絵が描けなくなっちゃうんだよ、そんなの、言いなりじゃないか」

音楽家は彼女の顔色をうかがいながら言った。彼の言葉に、少し悲しそうな目をする。

「だって逃げた人はみんな捕まってしまったって不自由な思いをしているのに……私達だけこんなふうに今でも楽器を奏でたり絵が描けたり」

音楽家はそれを聞いても同じ面のまま、それよりか笑っているようにも見えた。画家はそれに首を横に振った。

なぜ笑っているのかわからないからだ。

「さっきも言ったじゃないか。僕が君のパパだったら、君を一人外に放したりしないよ。特別な、理由が無い限り」

たつぷりと含みを持たせた彼の言葉に、画家はようやく言いたいことを思い出した。

特別な訳とは何か。

音楽家は楽器をベッドの足の奥に押し込むと、また画家の方をむきなおった。

「みんな知ってるんだよ、王様が何を考えているのか」

それから彼はもう一人の小さな絵師の寝顔に目を留める。そしてほほえむ。

「君達も、もうじき知るはず。その時が来るまで、一緒に待っていてあげるよ」

「泥だらけだぜ、まるきり違えたみたいだ」

広場の真ん中にある噴水で顔をあげると、また同じく泥だらけの男の顔を見上げた。

「いや、泥じゃない、油だろ……水じゃ落ちない。何てこったよ」

「まあ、すぐ慣れるさ。お前は器用だから、工場の奴らも気に入ってるさ、お前のこと」

顔を拭くとうなずく。

「ああ、そりゃあ嬉しいよ。工場で働いてる奴らはもっとこう、い

かついもんだと思ってたけどな」

「ふん、みんないい奴だろう？」

二人はそれからまたしばらくぐちゃぐちゃと話しながら家路に就く。それはここ最近の習慣になりかけていた。伸びる影をじつくりと観察する。

家に辿り着くときにはもうすっかり日が暮れていて、そのときになって初めてどこか悲しい気分になる。それは工場へ通い、そこで労働力として雇われることに違和感を感じているからか、それともまだ慣れていないだけなのか、彼は往生際が悪いらしい自分を哀れに思った。

「お帰りなさい」それは冬、薪を下ろすときにも同じ、いつも変わらずに彼を待つ声。温かく体を包む。

「遅くなった」

部屋中に黒い油の臭いが広がった。ただ、どこか慣れていたのは、油絵の具の匂いがあったはずの場所だったから。

「行水を作りましたから……どうぞ」

「すまない、ありがとう」

部屋の奥へと去る夫。

妻は彼がどのような気持ちでいるかを気にしていた。ただ二人の間にはぼっかりと穴が開いてしまったように、娘二人の帰りをどこかで待ち続けていたように、何も訊けずにいた。

それからの都は騒然かつ閑散としていた。その城下にはたくさん芸術家達が集まっていたから職を無くした者もいたし、何より民達の活気に陰りが見えた。それに誘われるように皆反感を持ったし、しばらくの紛糾もあった。

しかし誰も悪法には立ち向かわないし、団結し立ち上がったところで魔法を封じられてしまえばそれまでであった。

「あの子達には、言わなくて良かったんですか？」

妻はそう訊いた。触れないでおこうという気持ちを打ち破り、やっとの思いで出た言葉がそれだった。それは、それを訊いたあとには彼の声で消されていく。

「あの子達も、もうじき気づく」

夫はこともなげに言った。

「あの子達だって、予言や伝承については知っているだろう。それに従えば……なるようにしかないさ」

「なるようにしかないって……あなた、あの子達はまだ子供です、トワルなんてまだまとにも分別もつきません」

「それでも、あの力は本物じゃないか。お前も見ただろう、心配なのはわかるが、あの絵は正しく、神殿にあるものと同じ筆。油の量が多い方が好きだという、そこまであの絵とぴったりじゃないか」
伝承にはそうあった。そして、その天使は再びこの世界に翼を広げて戻ってくるとも。

「あの子はたとえ俺が絵師でなかったとしても、あの力を使えるようになったことだろう」

「……私も、信じています。それでも、何も知らない彼女達を放り出すことには気が……滅入ります」

吊り下げられた月は夜を見守る。ともに歌った月でさえも今はただ口を閉じたまま、何も語らない。

夜は悲しみを深くするものへと巡る。太陽はそんな月を対岸からのぞき、一層愚かに感じて笑う。

真っ白い髭^{ひげ}を垂らして微笑む老人。ほとんど顔は見えないはずなのだが、微笑んでいるのは髭の中から見えている二つの目である。ガラス玉のような目玉は三日月のしわで包み隠されている。「やあ、

お久しぶりですな、ブルウ・カンバス殿」

カンバスが驚いたのは、そのようなときにも笑顔で人を迎える神父の心の広さである。

神殿に肩を寄せる聖堂には、町に一人の神父であり同時に長老でもある彼が必ずいる。町の全ての者は彼を大いなる自然さながらに崇め、敬っている。

「ええ、しばらく忙しく、顔を見せる間もなく」

「それでよいですよ。時間を裂いてまで祈りを捧げること、そう深い意義は無くなりましょう。大切なのは、その心です」

一層見えなくなってしまう彼の目を見てみると、誰もが言い様の無い居心地の良さを感じるのであろう、とカンバスは思った。だからいつも教会には誰かしら何か相談に来ているものなのだが、その日には誰も無かった。

「皆さん、心を病まれていましうか？」

教会の長椅子に誰もいないのを眺めていたカンバスに、神父は言った。白い法衣の上に白い髭は融けかかっている。

「それはつまり……先の芸術禁止のことについて、ということですか」

「はい。……ここは芸術の都、そこに住む人々の奮わない様子を見ているというのは悲しいものですが……残念ながら、私には日々祈りに祈りを重ねることしかできませぬゆえ」

そう言った顔でさえ笑っている。一見すれば彼には教会の窓の光に微睡む（まどろむ）姿がよく似合う。しかし、彼も恐れていた。人の世界が吞まれていくことを。

「ですがご安心くだされ、カンバス殿。ここに眠る天使は、私が命に代えても守り抜きましょう」

そのとき、奥の扉が開き、聖堂に小さな少女が訪れる。

とがった耳、小さな体、白い肌、そして透明な翼。

カンバスは見慣れたものに目を疑うことはなかったが、いつ見ても、精霊というものの美しさには、多少の驚きを隠せないでいた。

「カンバス様、いらしてたんですね」

精霊の少女は言った。少女といっても、精霊の姿が変わることはないのだから、容姿を見てそう思うのは勧められることではない。

「ああ、久しぶりだな、アムー。元気かい」

「はい、私は元気です。でも……」

精霊アムーは神父の言葉を待つようにうつむいた。神父は柔らかな声で笑う。

「カンバス殿の前でそんな顔をしてはいけないよ、アムー。君の仕事は笑顔を届けること。心配などしなくて良いから、さあ、笑っていなさい」

そう言われるとアムーは途端にえくぼを作る。それが作ったものだということは、誰にでもわかったことだろう。

「はい、神父様。……カンバス様、何かございましたら、ご相談にいらしてくださいね。アムーは何なりとお聞きます」

彼女は言い切ると、笑顔を絶やさず振り向き、扉の向こうへ戻っていった。それに釘付けのカンバスにじっとした視線を送ると、神父は声をかける。

「あの子が、可哀想ですか」

その声にカンバスの背は凍った。下心はなくとも、少し慰めてやってもいい気がしていたのは確かだったからである。

「はあ、娘が歳の近いもので……」

「あの子は人間の子とは違いますぞ。精霊は精霊、情は禁物にございます」

カンバスは申し訳なさそうに頭を垂れた。いつになく神父の口は厳しいようだ。

「どうですか、カンバス殿。ずいぶんお顔が明るくなられたようですが」

しばらく、そのこと以外を考えることの無かったカンバスは、その言葉にはっとした。顔をあげれば、神父はまた笑っている。

「没頭し、陶醉するほどに、悪魔の良き住処すみかとなりましょう……人

を思いやる気持ちを忘れてはなりません」
彼の瞳から笑顔が消えないのは、それこそが、神殿の天使への死守である。

神殿に眠る天使は、退魔の力を持つ絹に覆われている。光の届かない神殿の柱の奥にも、神父の魔術は光を灯す。

彼の使う魔術というのは、聖魔術と呼ばれるものであり、精霊の魔力を借りて使うものであるから、彼はそのような魔術を見せるときには必ず精霊の石を手握っていた。

「このベイルを外すことは、カンバス殿のお望みとはいえども、できません」

神父は言う、その巨大な画板を指差した。

ちょうど神殿の高い天井に至るほどの大きさの図画である。そのような大きな壁を画板とするのは普通の人間の業^{わざ}ではない。風もないのにベイルは静かに揺れ、光を照り返している。

「しばらくここで祈りを捧げていてもよろしいでしょうか」

「はい、もちろん。教典をお持ちですか？」

「いいえ、今日が必要ありません」

カンバスがそう言う、神父はうなずいて、そのまま神殿の地下から去っていった。

カンバスは絵に祈りを。

天使はベイルの向こう側から微笑む。

天使を描いたのは、天界の天使エール。

これは全ての人にもたらされる福音の源であり、芸術に込められた魔術の力を制する枷^{かせ}である。

この枷の失われることのあるときは、人の世界はその強大な魔術の力に飲み込まれ滅びるときのことである。

ここ人々はこの聖なる図画を崇めなくては魔術を忘れるし、文明は途絶える。同じときに芸術もすたれ、いつかは全ての幸福は黒い絹の中に包まれ、二度と戻りはしないであろう。

大いなる自然の恵みをその身に受けている限り、それは命となり得るのだから。

天使エールは油で彩るのが大変良く、それも天の者の中にもひいでていた。

それを見る全ての人が驚くのは、その筆の速さであった。目にも留まらぬ速さで描き上げたいくつもの図画は、たくさんの者の目に広まった。そしてその美しさも際限のないことを表していた。

人の世界の芸術が魔力を持つようになったとき、天界ではそれに反対を示す者がほとんどであった。それによって世界の均衡の崩壊を招くと恐れていたからである。

芸術に魔術が込められたとき、ついには恐れていたことが起きてしまい、天界も魔界も、危うく皆虚無へと流れ込むほどであった。その窮地を救ったのは、大天使エール。彼はその全ての力を使い彩りを操ると、図画「純白」を描き上げたのち、翼を失い地上で姿を失ったという。

落ちた翼より生まれた予言者エグルは、そののちに再び天使を描くことのできる絵師が地上に生まれ堕ちるであろうと予言した。

しろいてんし(前書き)

二人は天使を探します。

消えてしまった、翼を持たない天使を。

純白のベイルの下、白い天使は微笑みます。

面影を残し。

しろいてんし

牢屋は狭く、その中には多くの芸術家達が幽閉しされていた。皆憔悴ようすいしきつた顔をしている。声もなく、しばらく暗い電灯の下には小さな咳払いの群れが留まっていた。

それから、毎日のように騒ぎを起こしているのは、隙を見て脱走を図る者らで、大体的場合彼らは警備の兵士に捕まってしまうのだが、その日の逃亡者は何だかいつもと違うようだった。

逃亡者は城の堀まで走ると、外で彼を待っていた協力者に笑いかけた。

「うまくいった！ 兵士達みんな煙に巻かれてるぜ……」
騒ぎを聞きつけ城壁の警備をしていた兵士達は皆城の中へ吸い込まれていった。

城がさらに大きく騒いでいるのは、協力者の彼が城に煙玉を投げ込んだからである。

「そんなことより、早くここから出ないと。兵士寮からも追っ手が来ちゃうよ」

協力者は言った。

「ああ、そうだな。急ごう」

彼らは城の堀を抜けると、高台を転がるように逃げていった。

二人は広場の噴水の縁に腰かけて、学校が終わる時間を待った。兵士達はそこまで逃げてしまった者を追いかけるほどの気もなく、誰も二人を追おうとしなかった。逃亡者は笑った。

「ああ、危なかった。角のところで兵士と鉢合わせたときはどうなることかと……」

「どうなることかと、じゃないよ。全く、どれだけ心配したと思ってるの」

協力者は懷から紙切れを取り出す。それは牢の中から届いた、助けを求める手紙であった。

「いやあ、巻き込んでしまって悪かった。ま、助かったんだし、不幸中の幸いってことで。一度は『人間小屋』に突っ込まれたけどな」それからからからと笑った。

「笑えないよ。僕がいなければノワールは助からなかった。もし捕まっていたら、どんなふうになっていたかわからないよ」

彼は手紙をしまうと、腕を組んだ。それを見た逃亡者ノワールの背に冷たいものがはしる。

「大体、こんなときに王様に物言いをつけるなんて、なんて無謀なの。そんなことしたら捕まるに決まってるじゃないか。しかも門前払いを食らったなんて、全然不幸中の幸いじゃないや」

「ああ、わかった、わかった」

ノワールはなだめるように言い、何も気にしていない様子で笑った。「そう言われると思って、しっかり見つけてきたさ、動かぬ証拠を！」

彼は拳を突きつける。手を開くと、そこには水晶の玉のように光る玉。日の光に七色に光っている。

「見よ、この宝玉を……これぞ、魔力の結晶さ」

「このガラス玉が？」

協力者は小さいrinkぐらいの大きさのその玉を指差した。

「ガラス玉じゃねえよ！　魔力の結晶だよ！」

「え、またそんな大げさな……下手な嘘はよしなよ。君の嘘はすぐにばれるから」

「嘘じゃねえよ！　本当だよ！」

協力者の顔はどうも納得いかない様子。ノワールは一つため息をつくと、満足げな笑みを浮かべる。

「ほら、見てろよ？」

そう言うとは彼は両手で玉を包んだので、協力者はそこに顔を寄せた。ゆっくりと指が開かれる。

「わあ……」

手の中から光が溢れて、金色の糸がちょうど太陽のまばゆさのように二人の顔の辺りまで赤く染めた。ノワールは太陽を掲げる。

「どうだ？　すごいだろ？　本物だろ？」

ノワールのそう言ううちに、玉の放っていた光はゆっくりと融けて消えていく。

「すごいよ、驚いたよ。でもそれ何？」

「だから、魔力の結晶だったの」

「その魔力の結晶がこういうもので、それが何の証拠になるんだい？」

「これで王が何を隠しているのかわかるかもしれないんだよ。とりあえず、これをブランシュの父さんのところに持っていく」

協力者はそれを聞くと眉をひそめた。

「ブランシュって……そのことと何か関係あるの？」

「まあまあ、日が暮れる前に行こう、アミ」

ノワールは歩き出す。逃亡の協力者アミはそれからしばらく彼の奔放さに悩まされることとなるのだが、今の彼が気づいたことといえば噴水の彫刻がすっかり撤去されていたことくらいで、ノワールの言うことを深く考える間もなかった。

扉にはカンバスと文字がかかっている。ノワールは扉を叩いた。

「こんにちは、ノワールです。カンバスさん、いらっしゃいますか」
ノワールがそう言ってすぐ、扉が開く。中から女性が顔を見せると、二人を見て笑顔を浮かべた。

「ノワールにアミじゃない。しばらくだったから、誰かと思ったわ」
ブランシュの母親は二人を招き入れた。先に敷居をまたいでいくノワールに、訳もわからずついていくアミ。

ブルウ・カンバスが勤めに出ていると知った二人は、二階に上がると彼の帰りを待った。

二階にあるのはブランシュの部屋であるが、今は何もない。ただ小さな机と二つの椅子、油絵の匂いだけが漂っている。

アミは部屋を見渡した。家具も何もない。それとも彼がここに来ていない間に、ブランシュの部屋はアトリエと化したのだろうか。どちらにせよ、生活の色は無色である。

「ねえ、ブランシュの部屋には……『家具』が沢山並んでいなかったっけ」

アミの言う家具というのは、かつてその部屋に並べてあったはずの画板の数々である。今はブランシュの水彩画も、妹の油彩画も見当たらない。

「あいつの絵はすごい。お前も知ってるだろ、描いた絵は全て観てきた」

ノワールは床の傷を指でなぞった。それは画板を立てた画架の足が付けた時間の証である。

「ここにあった絵は、みんな城で焼き払われたと……」

部屋にブランシュが座っている。彼女は筆と調色板を手にして笑う。彼女のその色を紡ぐ姿はそれこそが絵画のようで、二人はいつでもそれに釘付けで、時間は易く過ぎた。

窓に吹く風が絵の具の匂いを部屋に刻む。過ぎた時とともに、彼らの中にはその美しさが息づいていた。

実体は失われてしまった。止まったままの部屋には、彼女の姿はない。

「ずっと絵のために生きてきた。あいつはそう思ってるんだ。だから、逃げる道を選んだ」

開いた窓から少し赤くなった空が切り取られている。

「だから俺は、あいつが帰ってくるのを待つ。で、世界から芸術を奪う奴を許さない」

芸術を奪う世界は、また同じ世界。ひとつの世界はふたつに分かたれ、争い始めた。

それは預言者エグルの言葉の通りに。

ひとつはふたつへ、ふたつはひとつへ。

白い天使はベイルの中で笑っている。

神殿の奥に位置する部屋は冷たく、高い場所に立っているその
図画はその部屋を見渡す。

精霊アムーはその透き通る羽をもって飛ぶと、神殿の二階から
行くことのできるその画板へと近づく。

「この絵は七十人の祈りがなければ、ベイルからは出ることができ
ませぬ。教会に私のみとなった今では、観覧は二十年に一度と決ま
っております」

神父はアムーの飛んでいった画板の方を見上げる。彼女は光の粒を
撒きながら飛んでゆき、図画の台座に降り立った。

伝承の中にも幾度と名前を出される神殿エスポワール。その王
都が聖地と呼ばれるに由来する。

「昔は教会にたくさんの方が？」

アミは神父に訊いた。答えたのはアムー。天井近くの台座から声を
響かす。

「ええ、たくさんのお僧侶がいらっしゃいました。今では神父様しかいらっしゃいませんが……きっとそれだけこの町が平和になったということでしょう」

それを聞くと、ノワールは不思議そうな顔をする。それだけ平和になったとは、どういう意味なのだろうか。

神殿へともはやって来たキャンバスは、口を結んだまま、純白のベイルを見つめる。

アミはそれに気づきながら、早く話を聞きたい気持ちでいた。ノワールもキャンバスも、アムーも神父も、今ここにはいないブランシュも、知っているであろうことを彼は知らなかったからだ。

小さなときから、三人はいつでも一緒に。

進級とともに町の外の頭のいい学校に進む生徒もいるなか、三人はずっと都営の学舎に通っていた。

ほとんどの人が勤め始めたり、学校に通うことをやめたりで、だんだん上級生が減ってきていたし、いつの間にか彼らの階級、十二級生の生徒は彼ら三人だけになってしまっていた。

それでもブランシュは毎日しっかり通っていたし、ノワールはそれに誘われるように、アミはまたそれに誘われるように、三人は繋がっていた。

ブランシュは絵が学べる学校に行くために、十五級生までの修了を目指していた。

「そうでもなかったら、私今頃学校なんて行ってないわ」
十一級の修了証を手にして、ブランシュは言っていた。ノワールはさも興味がなさそうに唸る（うなる）。

「ふうん……」

アミは気づいていた。ノワールはブランシュに会うために学校に通っているのだ、と。

だからブランシュがいなくなったときには、それが何を意味しているのかわからなかった。なおさら、わかりにくくしていたのだろう。

二人ともそうだ。

「先生、今日も彼女は来ませんか」

その日には昨日も、一昨日も、ブランシュはいなかった。ノワールはそれを不思議に思っているようだった。

ノワールとアミの講義の途中、講師はその質問を受けると、大変困った様子だった。何か深く思案した後、苦笑いを浮かべる。

「本当は、言わないようにと彼女から言われたんですけど」

彼女は退学していたと。

講師はそれ以上は語らなかった。

なぜならば、彼自信、ブランシュの退学について多くは知り得ていなかったからである。

ただ、それから二人が、ブランシュが町の外に逃げていったことを知るにはそう時間はかからなかったのだけだ。

キャンバスはそのことについて隠したりはしなかった。

「では、ブランシュに何があったのですか？」

アミが尋ねると、キャンバスは小さくうなずく。

「よく見てほしい。お前たちなら、わかるはずだ」

吹き抜けの二階にいるアムーに目配せした。

精霊は腕を広げる。

彼女は羽を震わせ、両手に光を集める。いくつもの光の輪が薄闇に生まれて、彼女のまじないに従っていく。

小さな羽を持つ精の光は、連なりひとつの輪となって、神殿の一室にベイルをかける。

金の鱗粉^{りんぷん}が彼らの頭の上に降り注ぐ。

アムーの手から全ての光が飛び立つとき、彼女は図画を覆うベイルに手をかけた。

「今日は、特別ですぞ」

神父は二人の少年に微笑んだ。

ゆっくりとベイルは開かれる。

二人は目を見開いた。

そこには白い天使が描かれていた。

美しく翼を広げた、白い天使が。

かみさまのおうち そら（前書き）

神様はどこに住んでいますか？

かみさまのおうち そら

魔力の結晶というのはつまり、何かに宿っていた魔力の根源が、それだけで存在する形である。普通魔力には媒質が不可欠で、例えばそれは術師である。

術師はその魔力を自らの身を通して魔術とし、表現することができる。魔術として魔力が発揮されるのには、媒体となる何かが必要なのである。

魔力にはその根源があるため、それぞれの魔性の何かに宿っていないはずのその根源が失われてしまうと、魔力を持つことはできず、よって魔術を行使することが可能でなくなる。

魔力の根源は普通目に見えるものではないが、一度媒体から外界に飛び出してしまえば、実現されて結晶化する。

そのため魔力の根源の実現化後の姿を魔力の結晶と呼ぶのが一般となっている。

今となっては、その町に住む者は皆魔力を失ってしまった。

「では、カンバス様の魔力もお城の方々に？」

「そういうことだろう」

アムーはカンバスの手の中の宝玉に目を丸くする。

「それは、魔力の結晶……どなたがそのようなことを」

「地上の民にこんな荒業がなせると思ふか」

そう言って彼は笑う。アムーは首を横にふると、それからうなずいた。

「つまり、魔界の力ということですか」

結晶の中に二人の顔が映っている。またそれは不思議な輝きを放ち、玉の中を川が流れていく。七色に光ると、光の筋をいくつも導く。

「そう、ノワールはそれに気づいたのだろう。だから城に落ちていたこの玉を拾って、持ってきてくれた」

それを聞くと彼女はしばらく何かを考えていた。そしてぱっと顔をあげる。

「では……お城は魔界と手を組んでいると」

「おそらく、王が魔術を禁じたのも、魔界の仕業だ。おとなしく従わなければならない理由があったはずなんだよ」

カンバスは祭壇の上に伝承書を置くと開く。

「でも、どうして今になって？」

彼女は青い瞳で言う。

「魔術を行使することを止めたいのであれば、今でなくても良かったのではないですか」

それに答えたのはカンバスの指。

伝承の書にはエグルの予言の一節。アムーはじつとその文字を目で追う。

「ごめんなさい、私文字が読めないのです……」

彼女は少し恥ずかしそうに首をふった。

『再びエールの下界に降り立つとき、守る翼なくて争い起こる』

「争い？ ではそれは地上と魔界の争いのことだと」

「学校ではそう習うし、どの国に活版されたものもそういうふうに解釈されている」

カンバスは今まで何度開いて何度閉じたかわからない、そのページを閉じる。エグルの予言、最後の一節である。

「でも、この予言は大天使エールが地上に降りたあとのお話ですよ。天使は復活したのですか」

アムーは真剣な目をして、祭壇のカンバスを見上げた。

祭壇には老木の幹と、そこに翼が宿った壁画が描かれている。青い空の天井を突くように伸びた、羽ばたく杖。

薄暗い聖堂に天井近くの窓から光が差す。精霊の翼は姿を表しかけている。

「天使はよみがえった」

声が聖堂に響く。日差しが音をたてた。広い聖堂には二人の他に何もない。

「昨日見せてもらった『純白』は、天使エールの自画像だという説もある」

「それは一体……」

「昨日二人……アミとノワールは驚いてたろ。あの絵があまりにも“俺達の天使”に似ているもので……」

彼の目は舞う光を眺めている。その視線を追うこともなく、何を言うわけでもなく、アムーはいつも神父に言われていることを思い出していた。彼女の使命であると、神父は言うのだから。

「ごめんなさい、カンバス様。私、何だかいろいろなことを訊いてしまつて……」

カンバスの目はだいたい橙の光に濁っている。はたと彼女に視線を移し、その美しい微笑みにうなづく。

にじみかかった風景を明るく照らす、アムーの力。

「いいんだ。俺はただアムーにも知っておいて欲しかったから」

「でも、私は地上の民ではありませんし……人のこと、たくさん知ろうとするのは、いけないことです。違いますか？」

そう言った彼女の頬には咲く花のような笑顔だけがある。ただ声色は悲しげであった。

「アムーは人間界のことを下界とは呼ばないじゃないか」

「……天界の人達は、ここのこと、下界って呼びます」

「ああ、そうさ。お前がそう言わないのは、ここがお前の故郷になったからだろう？」

「カンバス様……」

扉が開く音がして、二人は息を呑む。

外の日差しの中から姿を表した神父の顔は二人を見るとすぐ厳し

くなった。

「神父様、お早いお帰りで……」

アムーは小さな声でそう言うと、いつも通りに満面の笑みを浮かべる。

「ああ、馬車がすいていてな、いつも待たされるところだったのだから……ときに、カンバス殿、今日はお勤めはお休みの日でありましたかな」

神父は長椅子の上に荷物を置くとやはり厳しい声で言った。

「はい、神父様……少し教会に寄ろうと……」

「アムーよ、人を招くのは正午を過ぎてからだといつも言っておるではないか……」

「ごめんなさい神父様……」

「カンバス殿、今日はお帰りくださいな……」

神父にうながされ、彼は教会から出ていく。アムーはその背をじっと見ていた。

「全く、いつまで経っても君は子供のままだ」

神父は腕を組むと、大きなため息をついた。「私ももう歳なのだから……そろそろしつかりしてくれないと」

神父の声は彼女の耳には届いていないらしく、それに呆れて神父は深い溜め息を押し出すと、長椅子に腰かけた。

「ねえ、神父様。カンバス様、近頃元気ないみたいです。何かあったのでしょうか……」

彼女は窓から差し込む光を目に映す。朝彼女が掃除をしたばかりだから、きれいに澄んだ光が届く。

「アムー、前にも言ったはずだよ。君には君の使命がある。人のことを知ろうとするのは、君の使命ではない。そうだろう」

神父は我が子を戒めるような口ぶりで言った。しかし我が子も同じアムーは、しばらく口をつぐんだあと首を横に振った。

いつの間にか聞き分けの悪い子になったらしい。神父は思った。

「でも神父様。カンバス様は言ってくださいました……私はみんなと同じだって。人間と同じだって……」

アムーは顔を赤くして言った。それからすぐに教会の二階へと飛び立った。

神父はしばらく何かを考えていたが、見当がついたのか、立ち上がり書斎へと向かった。

町は優しかった。

金のない旅人はたくさんいたし、誰も彼らを怪しんだりしなかった。

旅人が多いのはちょうど港町と隣接していることもあり、その町を宿場町とする者が多いからである。港町と連携した貿易によって栄えた貿易都市である。

そのためかつて都と呼ばれた場所は聖地と都市とに別れ、そのどちらも都と言われる。

もともと王都も含め貿易都市ボーエとすることもあるが、聖地である王都は全く独立した区画であると考えられることが一般のようだ。

人がたくさんあれば、考え方もまたその数だけあるようだった。外は雨が降り続き、夜になると町はずいぶん静かになった。

寝台にトワルが寝息をたてるのと、反対側の壁にある寝台の上の饒舌が静かになるのを確かめると、ブランシュは部屋の階段を降りていった。

一階の小さな部屋にある、小さな机の上に老婆が居眠りしている。その隣には手入れの行き届いた食卓が、客を待っている。しかし彼女達のそこに身を隠す間の七日間、客は彼女ら以外には一人も現れなかった。

ブランシュは老婆の寝息をも確認すると、部屋の隅にある扉をくぐり、厨房へと足を踏み入れる。ちようつがいの古く錆び付いた音に誰かが気づかないように、こっそりと。

悪事を働こうというわけではない。

重ねられた皿を水瓶から移した水に浸けると、そこにシャボンを混ぜた。誰かが目を覚まさないように、こっそりと。

夜になると目が覚めた。それは毎晩誰かが彼女を揺り起こしているかのような、七日目の夜なのである。

彼女自身、なぜそこにいるのかもわからなかった。だから、自分の身に起こっていることをあれやこれや平然と認めることができた。例えば夜遅く起きて老婆の手に負えないだけの仕事をしてやりするの、彼女が自ら望んだり受けてたりしているわけではないのであって、彼女にとっては何だまたまそのときに目が覚めて、たまたまそのときに汚れたままの皿が目に入っただけのことなのである。

彼女が今まで見てきたその宿での朝は、宿主であろう老婆の感嘆に始まるのであるが、その日は違った。

彼女が目を覚ます頃、部屋にはブランシュとトワルの二人きりのはずだった。

枕元に置いた父の水晶時計をのぞくと、針は日の出の印を指している。それほど早くいかなる用があるのだろうか、と彼女はすでに

姿のない豎琴手ムジクをそんなふうに気にしていた。

しかし、その八日目の朝には、今まで朝には姿を見せなかった彼の姿があった。

それがムジクであると悟るまでには少しの時間が必要だった。ブランシュは向かい側にある寝台の下で何か音がするのに気づいて、目が覚めたあとすぐに体を起こした。男が、ムジクの寝ていた寝台の足の奥を、低くかがんで探っている。それがムジクなのだけけど、ブランシュはしばらく、その男が同じ部屋に宿っている音楽家であるとはわからなかったわけである。

まるで寝起きを襲う盗人。

「おかしいな……どこへ行ったんだろう」

つぶやくと、彼は立ち尽くした。ブランシュはその背中に問いかける。

「何を探しているの」

その声には彼は素早く振り返る。それから、今までの七日間と同じ笑顔を湛えた。

「起きてたのかい？」

きつと彼の気配に起こされたのだろう、彼女はそう思った。しかし、何も言わずにうなずくだけ。

「目が覚めてすぐ悪いんだけどさ、僕の琴知らないかな。僕、ここにおくようにしてたんだけどさ……」

彼がそこに豎琴を寝かせているのをブランシュは知っていた。彼はとても困った様子。

「琴が無いんですか？」

「そう、無いんだよ僕の琴が。誰かに盗まれたかな？　はは、困ったな……」

盗人に盗まれたのであろうかというようなことを、彼は笑みを浮かべて受けとめているようだ。ブランシュが想像するのが簡単だったのは、彼が豎琴を探す姿がまさに盗人だったからである。

「まあ、昨日も働き者の小人さん達がお皿洗いをしてくれたのね！」

とうとつに二人の耳に入ってきたのは、下の階にいる老婆の声だった。

「僕あの人に訊いてくるよ」

ムジクは階段を降りていく。

窓の外の光が差し込むその先が腐った床だとしても、その光は聖堂で見るものとも変わらない。

ただ、無くなったものに気づいたときには、しばらく目の前の光がかすんで見えた。そして彼女は我に帰る。

一つの寝台に二人で寝ていた姉と妹の、妹の方がその部屋から欠けていることに気づいたのである。

二人の芸術家の大切なものが失われている、その部屋に一人でいることに心細さを感じた少女は、静かに階段を上る足音を聞いている。

「おばあちゃんも知らないって。確かに僕が楽器を持ってるということとは誰も知らないんだけど」

言いながら部屋に入ってきたムジクに、ブランシュは寝台から身を離す。

「妹を見ませんでしたか……私、今気づいたの」
部屋を見回して、ムジクは笑った。

「君の妹はベッドの下には入らないだろうしね。この部屋にはいないだろう」

彼の言うことはたまにわからなかった。その例がこのような言葉だ。

「君の妹には足が生えているじゃないか」

「あなたの琴には足が生えていないわ」

「この部屋に泥棒が入ってきてもおかしくないよ」

「でもこんなに小さな宿より、この町にはたくさん宿があるんだから、その客を襲うと思うわ。私が泥棒だったら」

「君は泥棒目指してるのかい？ それとも君の妹が僕の琴の足になったとか？」

「そう、でなかったら、琴なんて誰が盗むの」

ブランシュが少し強く言うと、彼は考えてうなずいた。

「それもそうだ……今楽器を持てば罪人になってしまうわけだからね」

「とにかく、探さないと……琴にしても妹にしても、みつからないことはないでしょう？」

「うん、そうだね。早く二人を探さなくちゃいけない」

彼の言葉のどこかに違和感を感じながらも、ブランシュはうなずいた。

少女は町の中を走っていた。

彼女は逃げなくてはいけなかったけれど、そのときは追っていた。ただ誰から、何から逃げているのかわからないよりも、誰を、何を追っているのかわかる今の方がまだ良いと、彼女は走りながら思った。

やっと太陽が出たくらいでも、商業区は賑わっていた。そのせいか、豎琴を盗んだ犯人は人のいない居住区へと逃げていく。

石畳の上にもっすぐ並んだ家屋の奥へ奥へ進み、暗い路地を転がるように逃げていく泥棒。それを追う少女は声もあげずに追う。

なぜならば彼女は人に見つかってはいけないからで、泥棒がどういうわけか狭い路地の中に入り込んでいくときには安堵していた。市場の近くに出れば当然町の憲兵もいるし、何より顔を覚えられてしまったら良くない。

三つ四つ路地を過ぎた頃には、少女は泥棒の姿をすっかり見失ってしまった。いくつにも別れた細い道を右へ左へ走った後には、道に迷ってしまった。

切れた息が風景をにじます。

路地には誰もいない。低い家々の屋根に切り取られた空は青い。静けさに耳を澄まして、もう足音も聞こえない。

追うこともできないし、帰ることもできない。彼女は溜め息のあと、ゆっくりと歩き出した。

知らない道を歩くと、思い出すのは七日ほど前に歩いた森の道。

あのときもこのように迷ったと。建ち並ぶ塀は森の樹。

枯れ草のような色をしたマントで顔を覆ったまま逃げていったあの泥棒は、竪琴を盗んで果たして何に使うのだろうか、と彼女は道に迷いながらも考えた。

確かきれいな琴だったから、店に売ったらさぞ高く売れることだろう。泥棒が金を目的に盗るには格好の標的である。しかし、何も器楽そのものが罪になる今になって、琴を盗む必要があったのだろうか。

迷宮のごとき路地を抜けると、噴水のある広場。大きな通りがあり、噴水の周りには婦人らが立ち話をしている。

ただまだ早い時間だから、人は少ない。

少女は広場を横切ると、宿のあるはずの商業区へと大通りを進んだ。

通りには人がちらほらと見えているから、彼女は少しずつ足を早めた。

真ん丸の瞳に、炎のように赤い髪、獣のような耳、なにより頭に生えた二本の角。

彼女が物音に目を覚ましたときには、その悪魔のような何かと目があったしまったのである。

何かを背に負っていて、彼女が目を覚ましたのを知ると、しばらくじっとしていた。

目を見て相手の気持ちを見極めているなか、少女は彼が背負っているものが、その部屋に寝ている音楽家のものだど悟り、動こうとした。

泥棒だ、しかし彼女の体は動かない。その泥棒の姿が人とは遠かったからであって、また言えばなんだか悲しげな目をしていたからである。

人は人でも牙もあり、人は人でも獣の耳もある、男は一目散に逃げ出した。

丁寧に窓を開けると、彼は体を小さくして飛び降りる。少女はそれを見ると宿の階段を駆け下り、逃げる彼のあとを追った。

「待て、怪しいやつ！」

通りを歩く少ない人々はその声を振り返った。

少女もまた同じく、声の主を目に映す。そして慌てて顔をそむけた。

そこには憲兵。三人の鎧をまとった兵士が、声をあげながら誰かを追っているようだった。

彼女は広い十字路の街灯に身を隠すと、そのようすをかいみみた。

逃げていく男はちょうど向かいの角を曲がるころだった。彼は全身を枯れ草色のマントに身を包み、背に何か背負い……。

「豎琴だ！」

彼女は思わず声をあげた。道にはぞろぞろと人が集まり、ちょうどもう一つの道を見回っていた憲兵も騒ぎを聞きつけやってきた。

そのとき、ざわめきの中彼女は人の群れを掻き分け、兵士の前に立ちはだかった。

何が彼女を突き動かしたか、少女は角を曲がりかけた憲兵達を通せん坊。

「なんだこの子は」

兵士は立ち止まる。

「おい、その呪印は……」

一人が言った。少女の方には、刺青のごとき呪いの印。それは芸術家の証。

「この娘は芸術家か？」

「もしや、都から逃亡したというあの娘らではないのか」

「今になって出てきたというわけか」

兵士の二人は彼女の肩に手をかけた。観客はざわめきを大きくして、やがて一連の騒ぎは少女についてのものだともいうようになった。

「私はあの獣を追おう、お前達はこの娘を」

一人は泥棒を追うに行く。

少女が兵士の手をほどこうともがいたのはつまり、楽器を他の人に見せてはいけないと思ったからであった。

泥棒を捕まえようと兵士が走り出すと同時に、彼女は兵士を振り払おうと暴れた。

「離して！」

少女は叫ぶ。

「離せだど？」

「離すわけが無かるう、さあ来い。王都からお前を探しに参られた騎士がおるのだ」

兵士達は彼女の腕を捕らえ、歩き出す。観衆は道をあげながら、何やらささやきあいながら少女を見ていた。

とたん、またざわめきが大きくなったと思うと、不意に彼女を拘束する力が弱くなったのは、その兵士達が道に倒れたからだだった。

鈍い音がした。それから何が起こったのかわからないまま、少女は石畳の上を風になっていた。

その手を引くのは枯れ草の色のマント。二本の髪が見え隠れしていた。

少女はしばらく息を切らしていた。そのとき彼女は自信を持って言うことができただろう、それほどまで早く走るとは後にも先にもそれきりだと。

逃げ込んだ路地裏で数人兵士が走りすぎるのを見て、互いに見知らぬ同士で胸を撫で下ろした。

辺りの騒がしさが無くなったところになると少女は確かに落ち着いて、用心深く辺りを見渡した。誰もいないことを認めると、何者かに声をかける。

「……ありがとう……」

それだけ言ったあと、何も言葉が繋がらなかった。彼女は顔を見せないようにする彼の姿を探る。

彼はやはりマントで顔を隠したまま、その声に言葉を返した。

「なんで追いかけてきたんだ？」

角を生やしたそれは、男の声で言った。少女は恐る恐るその声を耳に入れると、恐る恐るその声に答えた。

「だって、あなたがそれを盗んで逃げたから……」

「じゃなんで、あのときあの男達に向かっていったんだ？」

男達というのは彼を追っていた兵士のことである。

「それは琴があの人達に見つかったら、困るから」

「でもお前、捕まるところだった。お前も何か悪いことしてるから少女は不思議と彼を怪しむことはなく、見えた角を恐れる気持ちもだんだんと消えていった。

少女が兵士を止めようとしたのは、そのままでは彼も捕まってしまうからであった。豎琴を持っていれば、彼は罪人になってしまうからだ。

「……あんまり悲しそうな目をしてたから……」

それを聞いた盗人は、何か驚いたようにじっとしていた。それから枯れ草色のぼろの間から光る丸い目を覗かせた。

「お前、俺を見ても、怖くない？」

年はわからなかったもののその言葉やしぐさはまるで小さな子供のようである。

「びっくりしたけど、お化けではないから」

「こんな耳でも怖くない？」

「うん、あなたは悪いことをするようには見えないから」

「角が生えてても？」

「短い角だから」

彼は顔を隠していたぼろをはずした。

「これ返す」

彼は少女に琴を差し出す。彼女の手の中のそれは彼女が思っていたよりもずっと重かった。

「こんなに重いものを持って走ってたの……」

「俺は鬼だから平気」

「鬼……あなた鬼なんだ。私は人間だよ」

「うん、見ればわかる。でも、鬼は危ないから、気を付けろよ」

「鬼……じゃあどうしてここにいるの？ 人間はきつとあなたを捕まえてしまうのに」

彼は兵士に追われていた。人が鬼をよく思っていないのは、鬼は人だって食べてしまうからだ。少女はそれを知らない。

「……魔界の大人が探してる。お前を探してる」

薄暗い書斎、金のペンの紙に文字を並べていく音が静かに辺りを震わせている。本棚と机は燭台の光に淡く橙に照らされ、ときどき揺れた。

机の上には作りかけの鳥の模型が翼を広げていて、その周りには蠟の羽が散らばっている。

神父はその隣でさぞ嬉しそうに顔を綻ばせながら、文を書いている。彼がそのような面持ちで手紙を書くのは初めてだったかもしれない。

彼が隣国への文に書くのは最近ではもっぱら人間界の諸悪についてだった。民の不満が高まっているようだ、困窮する家族も増えてきているなどと。

しかし今日彼がそのようににこやかにして文を作ることができるのは、他でもなくアムーのおかげだった。

その揺り籠の中に眠っているのは小さな赤子。強い風の中でも鳴き声ひとつあげず、誰かの帰りを待っているように見えた。その子が教会の扉の前に名前を書いた紙を添えて眠らせてあったというのはつまり、悲しいことである。

「神父様、いかがなさいますか。この子はもしかや天界の子ではありませんか」

よく見れば額には小さな水晶が光っている。

「大いなる自然の前には皆同じ、生きとし生けるものなのですから」若き神父はその子を抱き上げると、風から守ってやり、それから教会にで彼女を育てると決めた。

「しかし神父様、天界の命をここにて養うとなれば、かなりの長命となります……私達の手におえますか」

若い僧侶は言うが、神父は教会の中に小さな妖精を招き、その子を教会の僧侶の皆に披露した。

初めは戸惑う僧侶達も、赤子のあまりにかわいいものだから、すぐにその子の世話に一生懸命になっていった。

やがて僧侶達は他の町や国へと旅立ち、最後には年老いた神父と司祭の称号を許された一人の僧侶、そして美しい娘へと育ったアムーの三人だけになった。

文の先は最後の僧侶。彼は一番よくアムーの面倒を見ていたから、彼女を心配する彼に答えて神父はアムーのことや身の回りのことをよく文に書いて送っている。

「あの子がこんなに大きくなりました、と……」

「神父様、よろしいですか？」

廊下からアムーの声がしたものだから、神父は慌てて手紙を本の中に挟んで隠した。蝋燭が揺れる。

「あ、うん、いいよ」

「失礼します……どうかしましたか、変な声で……」

彼女は扉を開けて暗い部屋をのぞく。机に向かう神父の右手には金のペン。

「お手紙を……タンドレス様にですか？」

「いや、少し隣町に用があったただけだ。それより、何か用かね」

神父が言うはうなずく。

「お客様が呼びです」

日の当たらない書斎に比べて聖堂には溢れそうな光が絶えず差し込んでいて明るい。

ちょうど中程に座る黒衣の巨体は、神父の扉を開く音にも見向きもせず、ただうつむいたままにいる。神父は扉を閉めると、手の中に水晶を収めた。

「いらしていただいてからこのようなことを申すのは申し訳ないのですが、午前は人をお招きしておらんです」

神父はほがらかに言う、男の座る長椅子の隣に腰を下ろした。黒の法衣に黒の頭巾と、まるで大昔の宮廷魔術師のようだと思いがら、その巨体を見上げる。

頭巾の下から一文字の唇が見えた。何も言わないし、表情もない。目に至ってはまるで見えない。

「もしご用でしたら、またお昼にしていただけますかな、それとも何か今でなければいけないご用でもお持ちですか」

神父が言う、男はようやく口を小さく開いた。ただそれだけで、そこから声が流れることはなかった。

「もしや……お主、魔界の者ではないか」
しばらく二人は沈黙した。

扉が開く音。が遅れて聖堂に訪れた。

「神父様、お客様に……」

彼女の姿が見えたたん、男はにわかに立ち上がる。

金色の小さな刃が男の手から抜け出して、差し込む光の間を走った。

神父は水晶を握りしめる。

その指先から同じく走った光は、金色の諸刃もろはにぶつかって瞬間まばゆく輝き、光を散らした。

アムーの足元に軽い音をたてて、金の短剣が転がる。弾かれた剣は時計の針のようになってから、おとなしく止まった。

三人はしばらくその様子を静かな目で見ていた。

かみさまのおうち だいち（前書き）

老婆は出ていった娘のことを思い、いつまでも待っています。

その扉から娘の帰ってくる、そのときを。

かみさまのおうち だいち

黒い頭巾をはがされて、男は神父の目を見上げた。その耳はとがっている。

太陽が高くなって、聖堂の丸天井に直接光を打つ。彩飾された水晶の天井は七色の光をあたりに飛ばしながら、その中に描かれた翼をふちどった。

促されるまま黒衣の男は膝をついた。彼はそのときまで口を開くことはなかった。

「もしかしてこの人、人の言葉話せないのでしょうか」

祭壇に向かい膝をつくすぐ横に、金の短剣を両手に持って立ったままのアムーは神父に尋ねた。

「話せるさ」

彼が小さな声で言ったから、神父はアムーにうなずいて見せた。

「あなたは向こうの……魔界から来たのですね」

彼女は身をかがめて男の顔をのぞきこんだ。

「そうさ。あんただってそうだろう、天界から降りてきたんだろう」
言われるとアムーは微かに眉を潜める。

「お主は刺客であろう」

神父が尋ねると、黒衣の男はすぐに口を開き答えた。

「そんな用でここにきたときには、俺はこんな過ちなく完璧に仕事をこなしていただろう」

それから後ろに組まれ、聖魔術で結ばれ自由を封じられた両腕に力を込めた。

「そんなことより、早くこれを解いてくれないか。俺はこの聖堂に入る役でここに来たんだ。苦労したんだぞ、それがここで足止めだなんて、ごめんだな」

しかし結び目はきつく、力めば力むほどに姿を濃くする光の糸が手

首を締め付ける。神父はその様子を見て考えた。

「つまりお主は魔界の官吏か」

「召し使いとでも呼んでくんな……俺は魔王の考えることがよくわからなくてな」

男はなおも何とかして手首の糸を緩めようとするが敵わない。その姿はおよそ悪意のあるようには思えなかったから、二人はなおのこと困った。

「それにしても、こっそり入るのになんだってこんな明るいときにしたのだね」

神父の問いかけに男は恐らく素直に答えている。

「暗くなると足元が見えないだろうが」

魔界に住む者の目は暗いところでもよく見えそうなものだが、とアムーは思ったものの、口には出さなかった。

「この教会では蠟燭だって禁止していませぬぞ、陽の光なくとも明るいのです」

しわだらけの指が壁の燭台を指す。

「ふん、よく言うな」

男はにらみあげると、立ち上がろうと力んだ。しかしその体も長椅子にくくりつけられており、彼の動きはほとんど封じられている。

「……この教会には……聖堂の他に、あるだろうが」

神父はどういうことかわからないという顔をした。

「何が」

「とぼけるな。光がないと進めない場所さ、さっきお前たちが現れた扉の向こうにあるんだろう？」

言ったとき、大きな扉が、聖堂の入り口が開く音が響く。皆が目を向ける。

「おや、その方は……」

身動きのとれない男を見て、聖堂に現れたカンバスは言う。

「カンバスさん、あれ魔族の一員じゃないか。どうしてこんなやつがここに？」

カンバスの隣で言ったノワールの声に、男の青い顔が赤く燃えた。

「こんな奴とはなんだ、こんな奴とは！」

大きな体が動くと、見えない糸で結ばれた長椅子が音をたてる。神父は白いひげの中で顔をしかめた。

「お願いだ、この教会を壊さないでください……」

「ノワール、怒ってるよ……ちゃんと謝って」

そのまた隣で言ったアミの言葉に、黒衣の男は急に落ち着くとにらむ。

「がきども、わかってないだろう。お前達は人、俺は魔族。俺には魔術が使えるんだ。お前たちなんか粉々にできるんだぞ」

ノワールの目が彼を見ている間、アミはアムーの手中的金色の刃物を不思議に思っていた。

「でも、ここには聖魔術の媒体があるから……魔術は封じ込めることができます。ねえ、神父様、アムー」

アミの言うことに二人は大きくうなずいた。

「その通りでございます。今もこの通り、動きでさえ魔術で封じておりますゆえ」

しわがれた声に上から言われると、男はその先に目を差す。ノワールはその様子に首を振った。

「神父様、この様子ではお話していただくにも、聞けません。ほどこいてさしあげてはどうでしょう」

使い妖精の提案にその主人は何故かと問う。

「だって、この人は優しい人のようですよ……」

「どうしてこっそり忍び込むような者が、私達に優しいと？」

彼女は小さく笑って、男の目の前に金色の剣を差し出した。男は驚いたようにその顔を見上げる。

「魔術で粉々にできるならば、私にこんな剣を投げつけることはないでしょう。殺める気はなかったのですよね？」

その微笑みに、男の顔はまた赤く染まった。それから何かぶつぶつ言って、目をそらす。

ノワールはそれを見逃さない。

「人も魔族も変わらないね、カンバスさん」

「あ……ああ」

耳打ちされカンバスは戸惑いつつうなずいた。

「では仕方がない。詳しくお話しをしていたくのでしょうか」

小さく眉を潜めつつ、神父は指先を結び目に触れてほどいてやった。

魔界の民は大きな体を小さな椅子に載せると、談話室を眼差しで探った。

五人は彼を取り囲むように座ると、その様子を案ずる。

「この教会に忍び込むつもりであったようですが、なぜそのような必要があったのですか」

神父の声には何も変わりがなかった。そしてその目には微笑みを湛えている。

「魔王の側近がそうするように言ったらしい。俺は側近とは口を利いたこともないが」

「どういうことですか、つまり人伝いに聞いたということでしょうか」

「まあ、そういうことなんだろうな。俺はしたっぱの中のしたっぱ。きつと偉い奴らは俺がこんなふうになることを知ってて行かせたんだろう」

男は人に敵意を見せる様子もない。

「お主の使命とは一体」

「俺の使命は、神殿の地下にある、隠された場所にいくためさ。魔界の奴らは知ってるんだぜ、そこに隠し持ってる物のこと」

「隠し持って、なんだよ」

とノワール。アミは首を横に振ってそれを制する。一方神父やアムーは何やら神妙な面持ちでその言葉を聞いていた。

「神殿の地下には、確かに隠してありますな、図画が。しかし、あの絵の結界を解いてせしめるというのは、いささか困りますな……」
そして声をあげて笑う。

「じじい、まだとぼけるか」

男が言うと、神父の目から笑顔が消えた。青い目は静かに男の目を見据え、その男の目は笑みを浮かべている。そしてゆっくり口を開いた。

「魔王はこの人間界を乗っ取ろうとしている。ここのところ妙なものは、そういう理由さ」

五人は言葉に吸い寄せられるように沈黙する。

「例えばこの国の王、聖地を治める国の王ロワが魔術の仲立ちである芸術を禁止したのも、それが理由さ。多分、脅されたりなんかしてるんじゃないか」

何でもないことのように言った。

時計の針だけがうるさく響いて、部屋の中でくすぶる。誰も何も言わなかったのは、誰も何も言えなかったからであろう。

ノワールは大きく溜め息をつくと背伸びをした。

「なあんだ、そんなことかあ」

窓の外に小さな鳥が留まる。さえずりと小さな羽ばたきが部屋の中にまで溶け込んだ。

人がたくさん集まっている道を抜けると、二人は人のない道へと

出た。家々が入り組んで並ぶ、迷宮のような住宅地だった。

二人は何か話すわけでもなくて、ただ時折辺りを見回しながら歩いていた。

少し広い通り、人ひとりいないところに見てみれば、彼女たちのもとに走り来る姿がわかった。足音は石畳の上を近づく。

「お姉ちゃん！」

そう呼ぶ声が聞こえて、姉は妹のもとへ駆け寄った。見れば彼女は何か大きな鞆を背負っていて、その中には白いものが顔を出している。彫刻を見ればそれが豎琴であることがわかった。

「どこ行ってたの？ 心配したのよ」

姉は妹の肩に手をのせて、彼女を叱った。悲しそうな目をする。しかし何も言わなかった。

「まあまあ、いいじゃないか。無事に二人とも見つかったんだし」ムジクはにっこり笑うと、妹の背から琴を受け取った。姉はまた彼の言ったことを妙に思いつながら、何も口に出さなかった。

「どうして琴を盗んだりしたの？ 大切なものだってわかるでしょう」

「違うの、盗んだのは私じゃない、私は盗人を追いかけたの。大切なものだから追いかけたの、本当よ」

妹に言われると、姉とムジクはしばらく目を見合わせていた。

「じゃあ、トワルが僕の琴を守ってくれたんだね。ありがとう」言われるとトワルはまた恥ずかしそうにして首を横に振る。

「ううん、私はただ、追いかけただけだから」

「どういふことだい？」

問われるとすぐ、彼女は答えた。「盗人は琴を守るために、琴を盗んだの」

扉を叩く音に老婆は扉を開けた。腐った扉は風に震える。

「いらっしやいませ……」

言って老婆は背の高い男を見上げた。金の胸当てに、金の籠手、緋色のマントに身を包み、いかにも位の高そうな金色のひげを生やし、そして笑みを浮かべている。

「お客様、失礼でございますが、もっと良い宿が市場の方に建つてますから、そちらに……」

「すまぬが、私は客ではない」

優しい声で言った男の背後には、反対にいかにも位の低そうな憲兵が二人ついている。

「もしかして、罪人なんかをお探しで」

「まあそのようなものであるが、ここから魔術師の匂いがするのだ……」

魔術師の匂いとはどのようなものかと尋ねようとした宿主であったが、問う間もなく男は宿の中に入り込んでいた。男は階段を上っていく。

「ありましたか、ソルダ様」

若い二人の憲兵は扉の外から問う。ソルダと呼ばれた男は何も答えずにゆっくりと階段を下りた。

「いや、何もない」

彼は落ち着かない老婆に目を合わせるようにして立ち塞がると、見下ろして言う。

「ここに泊まっている者をご存じですか」

「いいえ、何も……」

かすれた声が絞り出される。

「そうですか……いえ、念のためというものでございますよ」

まるで騒々しいような格好とは違って、優しく言っただけで扉を出ていく。そしてすぐに振り返った。

「まさか疑っているわけではありませんが……もしも罪人をかくま

ったりすればそれは……また同様に罪となりますから……そのような、お覚悟ください。では」

彼は深く頭を下げると、しなやかにマントをひるがえし、そこを去っていった。

しばらく見送ってから扉を閉めると、老婆は騒ぐ胸を必死でおさえようとする。

窓辺に飾った娘の写し絵を見ながら、似た年頃の彼女を、どこかで心配していた。

妹は鬼から聞いたことを全て話した。しかし、それを誰から聞いたかは絶対に言わなかった。

「じゃあ、聞き付けた兵士が宿を探す前に、琴を持っていたということ？」

「うん。私達のことを、魔界の人が追ってるんだって……誰だかはわからないけれど」

「それは大変だね……早く逃げないと」

ムジクはまるで他人事ひいいいのように言った。でもそれは確かに他人事ひいいいのようにも思えた。

宿に帰れば卓上には皿が並んでいる。働き者の小人が洗った皿の上には魚が載っている。

「お帰りなさいませ……」

小さな声が聞こえて、客を待つ机に目をやれば、老婆は何やら不安そうな顔をしていた。

「お客様、何か変わったことありませんでしたか」

突然に宿主が問うので、ブランシュとムジクは考えた。どこまでが

変わっていて、どこまでが変わっていないかがよくわからなかったからだ。

「どうしたんですか急に」

ムジクは穏やかな表情だが、宿主はやはり何か気にかけているようで、それを見る彼らも心配になった。

「先程憲兵達がいらして……赤いマントの、都の偉い方だと思うのですけど……」

「あの人だ」

とブランシュ。

「罪人を探していらっしゃるとか……私はもちろん何も知らないと言いました、でも、まさかと思うと心配で……」

皿が音をたてた。

「まさかあ、そんなことあるわけないじゃないですか」

ムジクは笑い飛ばす。ブランシュは慌ててうなずいて、笑って見せた。

宿の番をする老婆の眠る机の上に、金貨が二つ、銀貨がひとつ、老婆が置いてあることに気がついたのは、その日の真夜中だった。

かみさまのおうち うみ（前書き）

天の力を与えられた

そして人は奏でるようになった

そして人は祈るようになった

そして人は愛すようになった

地の力を与えられた

そして人は壊すようになった

そして人は争うようになった

そして人は憎むようになった

かみさまのおうち うみ

街灯の光もなく、人の声もない。三人の足音だけが小さく辺りを照らした。

市場の方はきっと賑やかなことだろう。人の集まるところを避けて歩けば、道は自然と彼らを森へ誘った。

噴水のある広場へと。

四方に別れた道に、彼らは立ち止まった。

「どこから隣町に出られるのだろう」

音楽家の問いかけに誰も何も答えなかった。

「そうだお姉ちゃん」

「なに、トワル」

「この町に来る前に森の中で確かお姉ちゃん、言ってたよね。この町に知っている人がいるって。あれって結局誰なの」

姉はそういえばと思った。しかし彼女もその者を知っているわけではなかったので、はっきりとはわからなかった。

「名前を言えばわかるって言ってたの、お母さん。でも会えなかったみたい」

姉が言うと、妹はうなずいてあとは何も言わなかった。

白い炎の蝋燭で妹の顔を照らして、姉は言った。どこか心細いは二人とも同じだった。

誰もいない。

「ねえ、君達、何だか足音が聞こえるみたいだけど」

ムジクが言ったとたんに、数々の静寂が一斉に彩られた。

遠くから馬の爪が確かに鳴っていた。だんだんに近くなっていることもわかった。それから、声も聞こえた。

三人は角を曲がると、足音の聞こえない道へ走った。馬の爪と人の足ではどちらが速いかなど誰にでもわかったこと、それでも逃げられないと、彼らは走った。

蠟燭の炎が大きく揺れて、ほとんど足元も見えなかった。

やがて彼らの逃げる先に、たくさんの足音が近づいていった。石畳の道が揺れるほど、近く大きくなっていく近く大きくなっていくひづめの音。

行く道を見抜くように近づく馬の先頭は、ついに次の角で彼らに追い付いた。

緋色のマントが見えたら、全ての時間は一時止まった。誰が止めたわけではないけれど、それは突然のことだった。

馬のひづめの弾みは消えて、おびき寄せられた獲物、彼女達の前には冷たい笑みを浮かべ馬にまたがる騎士がいた。

獲物達は立ち止まると馬から降りる姿を見据えた。暗闇の中に紛れた金色は見えない。

辺りに広がった蠟燭の白い光に照らされて、その笑みと一人に留める眼差しがわかる。ほのかに顔だけが白く見えた。

「やあ、久しく見えなかったな」

妹は姉の後ろに隠れている。暗い足下で乾いた音をたてた。

「おっと小さな方の娘、背中は何かと苦難が多いですぞ……」

息を交えた騎士の声に振り返れば、暗い道の先、彼らの背後から逃げ道を包み込むように、黒い影が立っている。手には鉄棒、男達は憲兵である。じっと暗闇から彼女達を偵察し、何かを待っているようだ。

「それはもちろん、お前達は二人、私は一人だ……等しくやりあおうじゃないか」

黒い風が吹く中、寝静まった町の真ん中に向かいあった鬼と追われ

る者らは、静かに小さく歪んでいった。

「これで対等だなんて、そりゃないよ」

ムジクは冷やかすようにそう言うのと、騎士の前に立った。隣に立つ馬の隣にも兵が並ぶ。

「ずいぶんてこずらせてもらったからな、これ以上機を逃すまい」
騎士は大変満足そうであった。

「でも相手が相手だよ。そんなに必死にならなくてもいいんじゃないかな」

「それもそうだな、男よ……しかし、お前も知っているだろうに」
「知ってるって……何を」

ムジクは首を傾けた。彼らが少し動きを見せるたび、周りでそれを見ていた兵達が一斉に矛を揺らす。

「僕はたまたま、森でこの子達と会っただけださ」

「ならばなぜ、その子らを守る」

「守るだなんて……ただ一緒に逃げようかってだけじゃないか。僕だって芸術家、のんきにしてもらえないからね……ほら」

ムジクは辺りの兵に目を向けた。並んだ憲兵達の矛先は威嚇したまま澄み渡っている。

その銀色の先端は何かに似ていた。トワルはそんなことを考えながら震えていた。

「するとお前はあのときの、大きな音で遠慮なく琴を奏でていた者か」

騎士ににらまされるとムジクはそのことを思い出したのか、息をのんだ。

「あ、あれは……仕方ないじゃないか、僕だって捕まりたくなかったし」

「ほう、お前は逃れるためならば人を谷底へ陥れても構わぬと、言いたいのか」

そして歯を食い縛った。恐らく、怒りに。

「無事で何よりですよ」

ムジクの言葉に、騎士の顔を血が登りつめる。収めるように咳払いを一つ。

「まあ、そうだな。良き話は後程ゆっくり聞かせてもらおうか」
その手が鞘へ伸びた。

ブランシュは微々たる身じろぎをした。恐怖によるものではなく、妹が彼女の服のすそを引いていたからだ。

ブランシュはトワルを見下ろした。妹の小さな手を、強く握る。その手も震えている。

「さあ、おとなしく私についてきたまえ」
剣の抜かれる音がした。

同時に、荷物の紐を素早く解きぬずれに似たものが耳をつく。見れば、豎琴を抱くムジクがいた。辺りがざわめく。

「おとなしくなること知ってたら、はじめから楽器なんて捨てていたよ。ねえ、ブランシュ」

ムジクは同じように笑っている。その目を見つめながら、ブランシュはゆっくりうなずいた。

トワルの手の中に力がこもる。二人は静かに父の言葉を思い出していた。絶対に捕まってはならないと。

「そうか……そのつもりならば、容赦は要らないようだな」

騎士の剣の先が、闇の中に赤く光った。強い力が波を起こして、風を感じさせる。

姉妹はその光に見覚えがあった。姉がそれに気づいたとき、妹は肩に手をあててその場にうずくまっていた。

赤い光はやがて闇と混ざっていくように強く、明るい光へ変わっていく。

「トワル、どうしたの？」

姉は声をかけた。小さくうめきながら苦痛に顔を歪めた妹の肩に、呪印が赤く光っている。

「……痛い」

「まだ呪印が生きているようだな、小さい方の娘」

風に震える窓の羽音。その間に騎士の声は聞こえた。琴を抱えたまま、ムジクはどこかへ姿を消す。

「呪印はこの力に共鳴し……また強くなる。私がこの力で呪印を操っている限り、お前の呪印は消えない」

トワルは痛みをこらえ、立ち上がった。

「それはいいことを聞いたね」

ムジクの声は、頭上から聞こえていた。屋根の上に腰をかける姿が見える。皆がその姿を見上げる。

「つまり君がその力を使えないようにしてあげればいいんだね？」
琴を持たない手で騎士を指差す。

「何をするつもりなの……」

ブランシュはトワルの体を支えながらつぶやいた。騎士の剣が屋根の上を差す。

「私はソルダ。王宮の一等騎士だ。最後にそうとだけ伝えておこう」
そういう言葉の後にすぐ、彼は剣を振り下ろした。

剣の先から弾けた光がまっすぐ屋根の上をめがけて打ち出された。強い光は雄叫びとともに暗い空に吸い込まれていく。

「ちよつとどいていてね」

光の弾を頭上にかわしたムジクは、道を遮るようにして並ぶ兵士に向かつて弦を弾いた。暗闇から放たれた響きの矢は途中で炎に姿を変え、それから石畳の上に火柱を作り出す。

トワルは小さく悲鳴をあげた。兵士達はどよめき、炎を避けるように道を開ける。

ムジクは屋根から笑顔を送った。

「今のうちに逃げるんだ」

「でも……あなたはどうするの」

その後ろで二人の兵士が炎にのまれて火だるまと化す。それを見た兵達は怯えて動けない。

「すぐに追い付くよ。さ、早く逃げるんだ」

いつでもそんなふうな笑顔を浮かべている彼を不思議に思いながら

ブランシュは静かにうなずき、そして妹の手を握って走り出した。音楽家は宵闇に消えていく彼女達の姿を、火の粉の中から見送った。

また森の中、隣町へと続く道を走る。白い炎の蠟燭で辺りの夜をかきわけて、二人は森を南へ南へと進んでいく。

どこからか馬のひづめが聞こえた。

「お姉ちゃん、追っ手が来る！」

走りながら妹は言った。

「まだ追いかけてくるなんて……どうしよう」

二人の来た道を馬がやって来るようだった。足音は少しずつ大きくなっていく。

「お姉ちゃんの魔術で何かできないかな。ムジクがやっていたように」

ムジクが使ったのはどんな魔術だったのだろう、ブランシュはそう考えて走るのをやめた。そして鞆から瓶を取り出す。暗い中にも淡く光を放つ、群青の絵の具。それはブランシュが小屋の中で作ったものだった。

「何かあったときのためのものが今役に立つわ」

瓶の栓を抜く様子を妹はじっと見ている。

「少し離れていて」

「お姉ちゃん、危ないよ。逃げようよ、失敗したら怪我しちゃうよ！」

妹が姉の手を制しようとするのをきかず、ブランシュは闇の向こうから聞こえる足音に瓶を掲げた。

「失敗しなければ大丈夫でしょう？」

ブランシュはそうして、笑った。

何かが彼女を強気にさせた。トウルは姉の笑顔がまた、何かに似ていたから、静かに離れて草むらに身を隠した。

馬の姿が遠くに見えたとき、瓶の中の青色は強く輝きだす。宝石

をちりばめたような光は溢れだしそうに瓶の中で渦巻いて、そして
ついには辺りに光を何層も放ち、そこから溢れて闇の中に溶かした
ように広がっていく。

かみさまのおうち かぜ（前書き）

逃げる二人は思い出の中に

かみさまのおうち かぜ

青い煙が辺りに立ち込めて、昇って枝の間を通っていく。木陰から身を現すとトワルは満ちる青色を手で払い、今まで馬の姿の見えていた道の先に目を向けた。

暗い森の道に青い光が影を作って、驚いて暴れる馬の姿が見える。重たい音が足の裏に伝わって、馬から誰かが落ちたようなこともわかった。

青い絵の具はしばらく、煙たく彼女達のまわりに霧を植え付ける。
「さあ、行こうトワル」

姉は手を引いた、しかし妹の体はそこを動こうとしない。

「お姉ちゃん、足を……」

見れば、彼女の足には何やら赤いものが流れていた。それが彼女の流血であると姉が思ったのと同じ、妹は頭上を取り巻くものに気がついた。

高い木の枝にまで広がった青い霧が影を作り、暗闇に形と輪郭を生む。見えなかったものが姿を表した。それは今まで聞こえなかった音までも連ねる。いくつもの小さな息づかい、牙の間を縫うとがった威嚇。

トワルは息を飲んだ。

そのとき姉は思い出していた。

痛みはそうして狭くなっていった。机に転がった小刀には小さな赤い玉が光っている。アミは傷薬でその傷口を閉じると、その日全く沈んだようなままのブランシュに笑いかけてみた。

「母さんが作った薬、よく利くんだ」

「ありがとう、アミ」

二人を何やら不機嫌な様子で見ていたノワールは、足もとに転がる作りかけの何かを拾い、手の中でにらむ。

「何だこれ、これが筆のつもりかよ」

指先を気づかいながら、ブランシュは机の上の小刀を少し持ち上げた。

「まだ作り始めたばかりだったの」

とはいえ、彼女がそうして一生懸命になって絵筆の柄を作っているのをしばらく眺めていた二人は何も言えなかった。それから二人は不器用に削られた木片を眺めるものだから、ブランシュは小刀を持っているのをやめた。

「私筆を作るのあまり好きじゃない。下手だから」

「だろうな、お前に筆作りは向いてないみたいだ」

ノワールが言うから、アミは訴えた。筆に目を落としたままの彼は何も気にしていない様子で、やはり機嫌が悪いように見えた。

「お前は絵ばかり描いていればいいのに……」

「ノワール、言い過ぎだよ」

アミはついにそう言って彼を制した。

「いいの、本当のことだしね、私そう言ってもらった方が嬉しいよ。私は絵ばかり描いていればいいんだもの」

ブランシュはその日通り、やはり暗い顔を見せきっている。ノワールはそう言われると何も返さなかった。

「もういいじゃないか。何だか僕達らしくないよ、ねえ。どこか行こう」

アミはそう提案した。いつもならばノワールが森へ行こう町へ行こうと言い出すところ、アミには彼の口からそんなことが出なかったように見えた。

そのところ三人は絶対にいつもと違った。しかしその理由を避けるようにして、彼らは口をつぐんでいるようなのである。

本当は知っていたけれど、誰も何も言わなかった。

「父さんと絵の練習を約束してるの忘れてた。もう帰らなくちゃ」

ブランシュはそう言うあたりで散らばった木くずやらを素早く片付けて、十一級教室を出ていった。ノワールも何も言わずにうつむいたまま。

「どうしてあんなこと言うんだよ、ノワール。絵ばかり描いていればいいだなんて」

彼女はそのときにだって、絵ばかり描いていた。学舎へ向かうか家で絵の練習をするか、その繰り返しであった。

「だってあいつは、十五級の修了証があればいいんだろ？　あとは他の奴らみたいに、どうせ遠くのお城みたいな学舎に通うようになるんだ」

その日にブランシュからそのことを聞いたのが、機嫌の悪いもとだった。

「それは仕方ないよ。ブランシュのお父さんは昔絵の先生だったんだから。ブランシュも先生になるために絵の勉強ができる学舎に行くんだよ」

「それじゃあ、俺達はどうあいつの絵が見られないじゃんか」
彼はそう思うとき思いの外素直だった。だからなんと声をかけたらいいかわからなくなってしまったのだった。

「でもまだ三年と少し先の話じゃないか。そんなにすねるもんじゃないよ」

「すねてねえ」

「すねてるよ。そういうのがすねてるっていうんだよ」

「だってあいつはいつもそういう大事なところを隠したままなんだ。あと三年でぱつといなくなっても困るだろ」

「もう、わかったよ。好きなんでしょ、ブランシュのこと。言ってきなよ、大好きだって」

「そんなことであいつが絵の勉強あきらめるわけないだろ。猿は黙ってろよな」

「猿……」

アミは髪の毛が金色で、背が小さくて、よく猿と言われていた。だ

からそれは彼にとって一番嫌いな言葉。

ノワールは言ってからアミの様子を心配していた。

「別に、いいよ猿でも。僕そんなことでノワールの嫌いになれるほど友達多くないから……」

アミはそのままいかにも悲しい背中で学舎を後にする。ノワールは独りため息をついた。

赤い道をたどると、深い小さな切り傷が膝のあたりにある。トワールはの足から段々と力が降りていって、やがて彼女はそこに尻餅をついた。

「お姉ちゃん、あれは何？」

指差す方向、頭上を見上げた。道の左右から伸びて先端を交えている枝から、無数の小さな光の粒が二人を見下ろしている。

青い霧が現した姿は宿り木のように枝に絡み付きながら、ゆつくりと二人に近づいていく。彼らと樹の幹がこすれて奇妙な音を発する。

「トワール、早く逃げよう」

姉は妹の手をとり体を支えると、走りだそうとした。しかし、妹の傷口はそこに結びつけられたようで、彼女の足は動かない。

「足に力が入らないの……もう走れないよ、私」

姉に頼りながら、彼女は膝を折ってそこに倒れかけた。

道の奥から霧を裂くような叫びが聞こえたのはちょうどそのときだった。

樹を伝い、土の上にたどり着いた彼らは、頭を打って倒れたままの憲兵に群がっている。匂いを嗅ぎ付けて集まった彼らはいながら餌に近づいていく。

彼らに体をむしばまれていくと、憲兵の声はやがて聞こえなくなった。

「お姉ちゃん、あれは何なの？ あの人はどうなっちゃうの？」
トワルは青ざめた顔でブランシュの手を握る。

「蛇よ。あなたも見たことがあるでしょう、森で毒蛇に襲われて医者に連れていかれる人」

「待ってお姉ちゃん、私蛇と命がけの鬼ごっこなんていやだよ」

「鬼じゃないわ、蛇よ」

「でも私足が動かないの。蛇の毒にやられたみたい」

「私の肩につかまって、早く」

ブランシュはトワルの体に沿うと、傷を負った片足の代わりになって見せた。少しずつでも彼女は蛇達から逃げていく。妹は足の手へ広がっていくしびれを感じながら、青い霧の向こうでうごめく蛇の群がりを振り返った。

「お姉ちゃん、あの人はい？」

「大丈夫、蛇に噛まれたくらいじゃ何ともないわよ」

「違うよ、あれは噛んでるんじゃないくて、食べてるんだよ！」

「まあかわいそうに、蛇の餌になるなんて絶対に嫌だわ」

二人は森を抜けていく。

そのときもそうだった。

夜、同じ夜だった。ブランシュは小さな小屋の扉に手をかけた。

月光の先に光るものを見たトワルが始めに息をのみ、それから言う。

「お姉ちゃん、誰がいる」

二人が向くと、そこには明るい色の馬にまたがる、金色の騎士がいる。マントが揺れて、彼は馬から降りる。

彼女達に笑顔を見せながら、彼は馬の首を撫でる。それからすぐに二人に向き直ると、腰を曲げて彼女達に尋ねるのだった。

「お嬢様方、急ぎ足でどちらへ行かれるのですか」

二人はしばらくその姿を見たまま硬直した。それからすぐに姉は言った。

「ええ、私達隣町にお使いを頼まれて、今ちようどこの小屋で休もうとしていたところなの」

するとそのいかにも騎士だというような男は、小屋の扉に打ち付けられた鉄板をのぞく。二十番小屋と示してあるのを確かめながら、口を開く。

「こんな遅くに、お嬢様方のようなお方が、隣町にお使いを？」

男の目は横から二人をにらむ。

「そうなの……こんな遅くに」

無理に笑う姉を見て、妹は震えた。

「そういえばお二人とも、先程王からの通達がありまして……こちらの方角に逃げる二人の芸術家がいますか、と……」

二人は互いの手を強く握りしめた。それからほんの一瞬であり、また長い間のことのようにも思えた。

「ごめんなさい！」

声に驚いたすきに、トワルは彼の手の甲あたりの防具のついていない場所に、赤い色の絵筆を振りかざした。穂先から光が溢れて、それから赤い力が集まり、男の肌を焦がした。

「な、何をした！」

騎士は火傷の痛みに一時うなり、それから一目散に駆け出した少女達に剣を向けた。

「疫病の悪魔ソワ、我に力を……」

後から追ってきた強い波動に姉は振り返る、と同時、何か足もとに転がった。それは妹の体である。光の残像が騎士の剣の切っ先から妹の体に繋がっていた。

黒い墨が彼女の肌の上に呪いを埋めていくのを、姉は見る。何かをしなければいけないと思っていた、それでも姉にはどうすべきかわからなかった。

それ以上に、何かが彼女の自由を封じ込めていること、彼女は気

づいていた。

呪印が完成したとき、剣が力なく地に落ちた。騎士の手から滑り落ちたようだった。姉は慌てて妹の体を支えようと、ともに歩き出した。

妹はほとんど意識を失ってしまったようだった。しかし、姉はその妹を助ける術をもたなかった。仕方がなかったのだと、彼女は必死に思いながら背中中騎士の苦痛を聞いていた。

「おのれ、いやしき魔術師め、覚えておれ！」

いやしき魔術師というのは自分のことを言っていたのではないか、姉は妹の体が次第に重くなっていくのを感じながらひそかにそう思っていた。

「お姉ちゃん、私、体が……」

妹の体は硬直していく、蛇の毒は残酷だった。

「トワル、パパと約束したでしょう？　もう少して町だから」

約束を思い出すと、二人は歩き出し、また止まり、また歩き出した。

かみさまのおうち　たいよう（前書き）

自然はそれからすべてを生んだ

しかし彼は自らの出生については決して明かすことはない。

かみさまのおうち　たいよう

調色板が床に落ちて、小さな音をたてて割れた。裂け目に絵の具が流れ込んで混ざっていくのを見ながら、トワルは筆を画架の縁に置く。

背中合わせに座っていた姉はその音に振り返ると画板をのぞきこむ。

同じ色ばかりが並んでいる。

「水彩は紙の上で色を混ぜなくちゃだめよ、油彩とは少し感覚が違うかもしれないけど」

「わかってるよ。別に初めてじゃないし」

トワルは三つに割れた調色板を拾うと、床に流れた絵の具を拭いた。

「お姉ちゃんこそ、ちよつと水が多いわ」

「トワルもいつもそうでしょ、決められた油の量を守らないじゃない」

何も言わずに画板に触れると、その上の全ての色を蒸発させた。それから机につくと本を開く。

「もう描かないの？」

「今日はもう描きたくないし、絵の具もないの」

「昨日買ってもらったばかりじゃない」

「いっぱい描いたから」

妹の手は顔の近くに手をもっていくとそう言った。姉はそれを見る。しばらく何も言わなかった。それからまた少ししてきいた。

「何かあったの？」

尋ねられたとき少しまばたきを長くして、彼女は首を横にふった。

「何も」

窓の向こうに目を飛ばしながら言うときは、それは大体嘘だった。

絵を描くときには楽しそうにしているトワルとは違うように思える。その頃の彼女は全くその楽しさも忘れてしまったようだった。

姉はそれを気にかけていた。

「嘘ついてるでしょう」

「嘘じゃないよ」

また顔に手を持っていく。

姉はそれが明らかな妹のくせであることを知っていた。

できるだけ優しく彼女に尋ねた。それは父の関心が彼女に向いていることを知ったことだった。それを自分にも隠しつつ、姉は妹を守らなければいけないと、そう考えていた。

「何かあったなら、話してみて。声に出すだけでもずいぶん楽になるでしょう？」

肩に手をのせて言った。トワルはじっとしていて、椅子の上で少しうつむいたように見えた。工房にはいつものように橙色の光が窓から差し込んでいる。

「学校でいじめられて……」

トワルは小さな声で言って、光の先を見つめていた。

「でも私、気にしてないから」

「嫌なことされたからいじめられてると思うんでしょう。何されたの？」

姉は必死にきいた。

「ただいじめられたただだよ」

「何かあるでしょう、悪口言われたとか、仲間外れにされたとか」

トワルは口をつぐんだ。右手を顔の近くで揺らすのを見て、すぐに隠し事を見破る姉。

ほとんど自分のことのように妹を思っていた。

「……魔女って言われた」

ブランシュは黙ってそれを聞いてただうなずいた。

「そのくらい、私も言われたことある」

「本当に？ お姉ちゃん、みんなと仲良しなのに」

トワルは顔を上げて、青い空を目に映す。

「うん、本当。今はそんなことはなくなったけれど、学校にたくさ

ん友達がいたときなんて……」

友達ではなく、ただそこにたくさん人間が集まっていただけだった。

「みんなに言われたわ、お前は魔女だって」

「私達は魔女じゃないのに」

それでも魔術師だった。

だから彼女達は何度も絵を捨てたいと思った。それでも絵がなくては体が空になってしまいそうに感じられた。

部屋には彼女達の描いた絵が並んでいて、いくつもの画架が彼女達を見守っている。

絵のない世界は考えることができなかったし、それこそ絵にも描けない世界など彼女達にはなかったのだから。

トワルは学舎の中でもたくさん絵を描いた。そして、彼女はいじめられ続けた。より一層華やかで、豊かな想像力を見る者をひきつけ、やがて誰にも負けないほどの強い世界を画板の上に作り上げることができるようになった。

彼女は絵の他には何も要らなかった。本当は、絵の他には何も知らなかったのだ。

そんな妹を哀れに思った姉であったが、妹の絵を描く姿を見るたび、妹を羨ましくも思えるようになった。

純粹に新しい世界の中に向かうことができる彼女だからこそ、純粹な世界を描くことができる。辺りの芸術家は皆、そのようにことを言っていた。

絵の中に沈んでいきそうな妹の体は軽く、いつそ二人で無限に続く絵の中に消えていけたらどんなに楽だろうとも思いながら、姉は歩いた。

「お姉ちゃん、もういいのに……」

ほとんど姉にすぎるようにして、妹は笑った。

「必要なのはお姉ちゃんなんだよ、きっと」

不思議な言葉だった。まるで姉は何も知らなかったような、本当は何も知らなかったような、そんな気持ちになった。

「それはどうということ？」

暗い森の中に月明かりが差し込んで、土の上で踊っている。青い絵の具はうっすらと背後を染めた。

それもまた同じ真夜中。

「ねえ、やっぱりやめた方がいいよ。危ないよ」

アミはそう言いながら、ノワールにはいつも同じことを言っているように感じていた。

いつでも彼の制止を試みて、そして付いていく始末であった。街灯も落とされた町の中を二人は音をたてないように素早く進む。

「大丈夫だって。ていうかお前、何でついてきてるんだよ」

「え、それは……」

「集会のときに王様がいたろ、あの右手に宝石の指輪をしていた。

王様は石が嫌いなのに」

「王様が宝石を嫌いなのは、王妃様が呪われた宝石のせいで眠ったままだからでしょう」

「だから、王様にはあの青い宝石の指輪をつけなければいけない理由があるんだ」

ノワールは自信に満ちた顔で言い張ると、神殿への道を急ぐ。まずは町の憲兵に見つからないようにしなければいけなかった。

「第一、それとこれとどういう関係があるの？」

「それとこれってなんだよ」

「神殿の地下のことで、王様の青い宝石のこと」

神殿には人がよく訪れた。聖地と呼ばれる訳にもなっているその場所には、たくさんの民が大天使エールを祭りに訪れるのだ。

町の教会は神殿に隣り合わせて並んでいる。その前の通りには必ず憲兵のいるものだ。二人は思っていたが、憲兵が門番のように立っているのは王宮の城門くらいで、神殿や教会には見張り一人いなかった。

二人は改めてその巨大な柱を見上げた。

夜の中にそびえる神殿は小さな月明かりをその頭にまとい、外壁と並んだ柱をそこに示している。神殿が町で一つだけ異様な雰囲気放っているのは、様式がどれくらい昔のものかわからないくらい昔のものであるからである。

夜に限り、その姿は不気味だった。青白く月の色に染まった柱のその奥は、夜よりも深い闇。

「神父様あまりよいことと思っていらいやらないようだ」

ノワールはぎこちなく言って、ふところから一編の書物を取りだし、アミに開いた。表紙には伝承の中の一場面の題が記されている。

「みつつのひとみ……三つの瞳？　こんなお話があったなんて、僕知らなかったよ」

アミは興味深そうに進めた。

『昔そこには三つの目を持つ大きな者があった。自然の造った闇の蓋ふたの下に暮らしていたが、上に住む者達に悪さをしていたから、天界を司る自然と魔界を司る自然、下界を司る自然はそれぞれ大きな目に一つずつ災難を与えた。三つの目は三つの呪いを宿して粉々に散り、美しい宝石を作った』

かみさまのおうち　たいよう（後書き）

こんにちは

読んでくださってありがとうございます

作者は最近非常にコンディションが悪い様子で、文章も支離滅裂になってきました。

が、このお話はまだまだ続きます。そんなに壮大な連載してどうするの？

でも見てくださる方がいらっしゃる限り書いて書いて書きまくる！
書きまくってやるんだから！

きつと終わるまで書く。

という決心にどれだけの確信が寄せられるか心配なんですけど、どうぞよろしく願います。

かみさまのおうち つき(前書き)

夜神殿に入ると、怪我をします

かみさまのおうち つき

砕けた三つ目の魔物は苦しみを魔界の民に分け与えた。だから、のちに三つの瞳のかけらは魔界の民を寄せたり離したりした。

天界の自然に不幸を与えられた一つ目の瞳は緑に笑み、魔界の民を癒すだろう。

下界の自然に不幸を与えられた二つ目の瞳は赤く燃え、魔界の民を滅ぼすだろう。

魔界の自然に不幸を与えられた三つ目の瞳は青く沈み、魔界の民を明らかにするだろう。

「ずいぶん昔のお話なんだね、僕には途中からよくわからないや、先生もこんなお話知ってるかな……」

アミは神殿の柱の向こうを憲兵の蠟燭が通りすぎたのを確かめて、小さな声で言った。二人の憲兵は何やら明るく語り合っていて、そこらには気づいていないようだった。

「そう、この神殿ができる前のできごとを言っているんだろう。ブルウカンバスはそう言っていた」

ノワールがそう言うことには、彼はその本をブランシュの父から預かっているようだった。

「カンバスさんが伝書を持っていたの？ 珍しいものは教会に蔵書されているはずだけれど」

「これは俺が勝手に持ってきた」

当たり前と言う彼に付き合うことは大変に危険に思えたが、アミ一人ではどうにもならないくらいに、ノワールは自由奔放だった。

「神父様に怒られるよ、そんなことしたら……」

「この際関係ないさ、昼に話を聞いていて、わかっただろ。教会だ

って宮殿と同じように隠し事をしてるんだ。違くない」

「そんな壮大な……」

アミは半ば信じられなかった。

「つまりその王様の指輪が、青い瞳だということ？」

「よくわかったな。そう、あれは青い瞳だ。その伝承には、青い瞳は魔界の民を明らかにするとあるだろ、それは姿が人間にも見えるようになるってことだと思うんだ」

「王様は魔界と通じている……青い瞳で？」

「他にも何か力を持っているだろう、何せ人間界の自然が唱えた呪いだからな」

ノワールは柱の陰から姿を現すと、神殿の入り口に立ち入った。それを追いかけながらアミは辺りを気にしていた。

『やがて長い年月を経、三つの瞳は三つの自然のもとに封じられた。それぞれは何も害することのないように、天界には緑の瞳、魔界には青い瞳、下界には赤い瞳を封じる。呪いと呼ばれた瞳は封じられた力の中でひそかに地上を見上げている』

月明かりは遮られ、本当の暗闇がその部屋を満たしていた。

風がゆっくり流れる神殿の内側は広く、その奥の階段を下った向こうには小さな部屋と祭壇があり、頭上には純白の絵画がほえんでいるはずである。絵画があるのは吹き抜けのようになった二階で、誰もそこに近づくことはできないようになっていた。

ただそれも今は見えない。柱と柱の間の門扉から溶け出した小さな月明かりが彼らのすぐ足元だけを照らしている。

一人はそれからすぐに歩き出した。黒に塗りつぶされかかった背中をもう一人が引き留める。

「どこ行くの、ノワール」

不安げに尋ねた。

「神殿の地下」

「地下って……階段の下には祭壇しかないじゃないか……」

一階よりも高い場所にある天使の微笑みと、低い場所に掘り下げられた祭壇。

「神父様は祭壇よりも向こう側に行くと怒るだろ。何かあるに違いない」

神父はよく神殿の中に入ろうとする子供をつまみ出していた。思えばその先には一度も立ち入ったことがなかったのである。

「きっと、危ないからだよ……奥は暗いし。やめた方がいいよ」

アミはだんだん怖くなった。先の方でうごめく暗闇が二人を飲み込もうとしているようだからだ。冷たい風が吹いて、少し震えた。

それに気づいたノワールはにやりと笑みを浮かべる。

「なんだお前……怖いのか？」

「違うよ、僕はただ危ないよって……」

「お前それでも男か、ほら来い！」

彼は手を引くと、闇の中に引きずり込んだ。体が黒に包まれるとともに全身の毛が逆立つのを感じる。

ノワールの合図でアミは光玉を足元に転がした。高い天井に渦の火花が昇って小さな太陽をつくり輝く。光は薄くのびて辺りを一面明るくした。

「大したことないな、もっといいやつを持ってきてくれりゃいいのに」

薄暗いままの階段を気を配りながら下り、ノワールは言った。

「ごめんね、いいやつを作るには高くかかるんだ」

天井の近くで光が音をたてている間、二人は祭壇に近づいた。教会にあるものよりも大きい祭壇の上には、翼を広げた杖の絵が彫られている。

「この壁画、どこかで見たことがない？」

天井の光がまたき始めたとき、アミが祭壇の手前で言った。ノワールも並んでその壁画をのぞく。一枚岩の上に刻まれた杖の象徴と翼の象徴はいかにも昔に作られたもののようにだ。

「教会にあるのと同じだな。あんまり昔からあるものだからよくわかってないって、先生が言ってた」

「どうして神殿と同じように教会を造ったのかな……」

光は最後に小さな火花を散らして闇の中に戻ってしまった。とたんに世界は重たく肌にのしかかる。

「だからいいやつを持ってこいと言ったのに」

「仕方がなかったんだよ、お金が……」

瞬間、二人の目がくらむより先に、何かが目の前で弾けた。目に映る黒が大きく引き裂けて、間から白が吹き出し辺りを燃やす。

ノワールは吹き飛んだ体をゆっくり起こした。もう少し遠くにはアミが横たわっている。気づけば天井から明かりが差し込んでいるように感じられ、打ち付けた痛みをこらえ見やれば、何かが高い場所から降り立つのがわかった。

祭壇の手前に広がった白は次第に淡くなり、その翼のある姿を闇の中に現した。

「ごめんなさい……私、てっきり泥棒かと」

ノワールは立ち上がると、笑った。その目の前にある姿は光をまとう力だった。

「安心して、泥棒じゃない」

「お怪我ありませんか？ アミティエくん……」

倒れたままのアミをのぞいて、彼女は不安げにしている。

「あ、大丈夫、大丈夫だよ、そいつは見た目よりも強いから」

「そうなんですか？」

「そんなことより、その弓、下ろしてくれるかな、アムー？」

ノワールに言われると、彼女は手に持った力を解いた。黒に塗りつぶされて消えた弓と呼ばれた力は粉々に散る。

アムーは頭を下げた。

目を覚ましたときに二人の話す声が聞こえて、しばらく気を失ったふりをしていたアミであったが、その二人に交ざるようにしてい

る神父の姿を見つけると、ゆっくり体を起こした。

「おお、彼が目を覚ましたようですぞ」

神父の顔が晴れて、アミの枕元に寄る。彼が安心したことには、そこに誰の親も見えないことだった。

「よかった……頭を打つてもうだめかと思いました……」

横たわっていた場所が教会の長椅子であることに気づいたとき、ノワールは少しばつが悪いような顔をしていた。

「だから、そいつは見た目よりしぶといだった」

アミは何も言わずに上がらない右腕を持ち上げて見せた。ぶつけた痛みで腕は体に杭打たれたようになっていた。

「もしかすると腕を砕いているようすな、ちょっと待ってください、今薬を」

神父は暗い聖堂の扉を出ていった。アミは神殿の出来事を思い出して、身を震わせた。

「そういえば、何か爆発のようなことが……あれは何だったの？」
申し訳なさそうに頭を下げたのはアムー。手に灯りを持っている。

「私、勢い余って矢を射てしまつて……」

「俺達を泥棒と間違えたんだとさ」

ノワールが言うのとさらに申し訳なさそうにうつ向いた。

「ここら辺って、そんなに泥棒多かったかな……」

少し考えながらアムーを責めることができないのは、やましいことがあるからだと確認した。

「わしがしっかりと見張るように言いつけておるのです。このような夜深くに誰かが訪れれば、泥棒と違われても構いますまいな」

湯気のたった湿布をアミの腕に施し、神父は言った。その手つきも言葉もいつもより幾分厳しかった。薬草の妙な匂いが鼻をつく。

「全く、普段より言っておるではないですか、神殿には勝手に入つてはいけませんよと」

「ごめんなさい……」

こりた様子で言うのはいつもアミの方で、肝心のノワールは全くそ

つぽを向いているようだった。

夜の先から扉が開く。

「謝ることないさ、隠してるのはそのじいさんだろ？」

昼、教会に忍び込まんとした大胆な刺客は、霞でできた鎖をぶら下げてやってくる。飼い犬のようにされた男の飼い主は厳しい面持ちの神父である。

「何であいつがまだいるんだよ」

ノワールに尋ねられると、アムーは優しく笑った。

「秘密を知るまで帰らないとかなんとか言っているようなので……仕方がありませんよね」

神父はじつとりうなずいた。

「しかし、何度も言っておろう、この教会にはそのようなことは何もない」

アムーの手に持っている手提げの燭台が揺れて、聖堂の真ん中辺りを明るく照らす光に照らされた彼らの姿は影のように揺らめいている。

ノワールはしばらく誰も何も言わないのを見て、そこに分厚い本を出した。神父の手の中に渡る。負傷者は息を呑んだ。

「この本を……どうしてノワール君が？」

神父は叱るわけでもなくただそう尋ね、うなずいて答えただけのノワールの目を見ると、やはり何かを隠しておくにはすぐにばれてしまうものだと思い、椅子にゆっくり腰を下ろした。

窓から差している月明かりがこれほど不気味に蠟燭の光とぶつかり溶け合うなど、なかなかなかった。

あかいひとみ（前書き）

王はたいへん病みました

でも医師にもなせぬ病でありましたから、そういうときに人は、運命という言葉を思い付きました

あかいひとみ

演台の王の指に青い光が見えた。その光は部屋の中に青い糸を巡らせて何かの姿を映し出すようで、彼の目には何か他のものが入り込んでいるようだ。

「王様、最近ずいぶんお疲れのように見えますが、何かお変わりございませんか」

巨大な兵が言った。槍の刃先を石の床に映して、頭を下げた。鉄の塊に足が生えているように見える。

「構わないでもらいたい」

「お気持ちはお察ししますが、今日や昨日は何もお召し上がりになられていないと聞きました」

鎧の向こうから漏れる声は鉄の継ぎ目に響いて奇妙にこもっている。肩のそばや首のあたりに何らかの黒い色をした魔物が近づくと、目は眠たそうに泳ぐ。かつてあった優しい眼差しはほとんど消えた。

「お休みにもなられていないのではないのですか」

抑揚のない声はいちいちうるさかった。

「もう私に構わないでくれ、お願いだ、いいや命令だ」

王はにわかには立ち上がると、足を引きずるようにして玉座を逃れていった。

からくりになされた兵は命令という言葉を聞くとそれから、槍の刃先を天井に向けて、玉座の隣に大木と化している。

寝台の足のあたりには黒色の蛇が楽しそうに踊っていた。毎夜数

を増すように見えるのは、毎夜国王ロワの目が闇の色に近くなっているからだ、魔王の使いはロワに伝えた。

青の指輪で遮られたうつつは夢に彩っていくように彼を縛っていた。

「青い瞳は王の存在をあたりに広く伝えます。それから、あなたの望む全てを叶えることができますのです。魔族伝統の魔術でね」

「レーヌ……目を覚ましておくれ。この国にはあなたが必要だ……」
青い光に祈り続ける王の言葉はただ繰り返されるだけで、王妃の耳には届かない。

光溢れる地下の一室の、瑠璃の棺の中に変わらない姿で眠る王妃は何も知らずにただあるだけである。光輝く宝石を取り除く代わり、せめて棺だけでもと、瑠璃の棺の中に横たえた。

「女王様はあなたの祈りなくしてはお目覚めにならないでしょう……」

王の耳元に言葉が届いた。振り返るとそこには赤い目が見ていた。引き込まれるような色に王は魔物を振りほどき、棺を隔てて向き合った。

消えかかった魔王の使いの姿に指輪をかざすと、その冷たい笑みははっきりと地下の蠟燭の光に浮かび上がる。

「いやあそれにしても、この地下の部屋がどうしてもこんなに嫌なものに満ちているのかと思えば……蠟燭の光でいっぱいになっていたのですね。その宝石の光が見えないものですから、どこへ行かれたかと心配になりました」

王の眉間に刻まれたしわは一層深くなる。

「どうです、その宝石の力を持って使い魔や悪魔やらとお話しになるのも楽しいものでしょう」

王はそう言う青ざめた唇をじっと見つめていた。魔王の使いは透明な棺の中をのぞき込み、また静かに笑う。

言葉は絞り出される。

「いいものか、こんなもの……」

「おや、お気に召されたようでしたから、差し上げたのですが……」
「毎夜暗くなると得体の知れないすすのような黒いものが私の周りを踊り始めるのだ。そして何かをささやいてくる。まるで私をだまそうとしているようで、眠ろうとしているところを無理矢理に起こしてくる……それが怖くて、怖くて仕方がない」

震えた声に青い光が揺れる。

「王様のお召しのものは、わたくしどもの目には大変によく見えるのですよ。その青い光を目印にして、この地上に巢食う卑しい魔族の出の者がいたずらをするのでしょうか」

「果たして、お前はなぜこのようなものを私にくれるというのだ。

私にはわからない。なぜ私はこの石に心を奪われるのか。これほど憎い宝石というものを、この身から引き離すことができないのだ……」

王は愛しい青に触れた。

深い色は王の指先から溶け出すと、辺りの光と交わっては弾ける。

「それはもちろん王様、あなたには願いがあるからでございます。

あなたには願いがあるから、その宝石が叶えてくれようとしているのです」

「私の願いは叶わなかったではないか」

王は棺にすぎた。

「あの日々は美しかった。私はただ孤独でない日々が戻ってきさえすればよいのだ。なのにこの宝石は、それさえも叶えてくれないではないか」

王妃は目覚めない。魔王の使いは哀れな姿を目に映し、人の姿を笑

う。

「先ほども申し上げました通り、王様には少々願いが足りないのでございます」

棺から顔をあげると、使いを見上げる。

「願う方とはどういう意味であるか」

「その石が望みを叶えるには、その石によって明らかにされた魔物に願うことが必要なのです。その石があれば、こちらがその気でないくても、あなたが好きなときに魔界の民を呼び寄せて、願いを叶えるようにと頼むことができるということです。王様、あなたの枕元に現れるという黒い者達に、願うのです。あなたの望みを叶えるのです」

赤い瞳は一層深く王を引き込む。

「私の望みを……叶える……」

棺の王妃は微笑む。

「さあ、この蠟燭の光を消してください、少して終わります」

「魔王様、簡単にすむのですね、人間とは、人間とはあまりにも簡単だ！ ついに王の心は私のものになるさ！ さあ、悪魔に望みを叶えてもらったら、どんなふうになるかな、魔王様、私にもこの命の中で一番美しい時間を見せてください！」

そろそろ、誰も王宮に口を出す者がなくなった。ただ、幽閉され

た芸術家達はそのまま戻ってこなかった。

しばらくの時間が過ぎて、誰もがその国に順応した。活気がなくなったのは確かである。

働き手が減り、国は弱くなっていく。辺りの町の罪人は聖地の城に幽閉され、それから数日で城から運び出された。そして二度と帰ってこないのだと人は噂した。

王がすっかり姿を見せなくなってしまったから、人はどこか哀れに思ったらしく、不満を垂らす者も消えた。

全くそれは、誰かの思い通りに動いているということなのだが、ほとんどの人はそのようなことには気がつくよしもない。ただそれは当たり前のことだった。

勘が鋭いらしい父も、少年もその友も、教会の長老もその娘の如き妖精も、見えるはずのないものが見えてしまった、みてはいけないものを見てしまった、そういう者は皆、口を開くことをしなかった。

物言いをすれば、消されてしまうからだった。

ただ彼らは何かが変わるのを、何かが光へ向かうことを、誰かが無事であることを、懸命に願った。

ただ言うまでもなく、軍国は再来し、誰かの思うがままに、世界は一本の道を歩んだ。それは権力者であったり、絶対に逆らうことのできない運命であったり、火にも水にもかなわないただの予言書であったり、人は何にもかなわないらしかった。

うつしえ（前書き）

むかしむかしのこと

人はたくさんものを作って、
たくさんものを壊しました

うつしえ

薄暗い部屋は古い木の匂いと、太陽の匂いがした。彼女は幾度目かの懐かしさに、凍えるような思いだった。暖かいはずの部屋の中、ただ彼女は冷たい体を横たえて、目を閉じた。

扉が開く。昼の色をした陽を見ると、薄暗いのはこの部屋だけのようだ。

少し間を空けて、優しい声が聞こえた。

「調子はどうですか」

その姿は聖地の教会の神父と被った。しかし、ひげの長さがまだまだ足りないと思うと、やはりここはもともといた場所ではないと、彼女は悲しくなった。

さらに調子は悪かった。体の中が煮えるように熱く、さらに全身が重く、息は苦しい。

「悪いです」

なるべく調子が悪いように言うと、白いひげを生やした男は小さく笑った。あまり調子が悪いようには見えていないらしかった。

「それはよかった」

彼の言うことは、もうろうとした意識の中で謎めく。

「どうして？」

「いや、あんなに強い毒に冒されていたなら、苦しいのもわからないくらいだったでしょうから」

そうしてまた笑うから、彼女は何も言わずに目を閉じた。

胸のあたりが音をたてながら腐り落ちていくのを感じると、彼女は何やら自分の命が危なかったということを悟った。

道筋は森の中で途絶えている。

「ここは……」

「ここは大きな森の中の小さな村でございますよ、あなたは外れに倒れておりました」

思い出せば、そんな気がした。

誰かに助けられたはずだったが、その誰かを思い出すことができない。毒に食われて、そこだけぽっかりと、穴が開いていた。

「そうだ、お姉ちゃん……お姉ちゃんは……」

うつろな目で姉を探す少女。しかし、その狭い部屋には、二人の他に誰もいない。

「どなたのことでしょう……私も、あなたが運ばれたのを見ていただけですから……」

それから確か、音楽家をどこかにおいてきた気がした。

姉もその人を心配していた気がするし、恐らく何か彼の力が必要なのであろうと、妹は寝台の上一人思った。

少女は彼の馴れ馴れしい様子が嫌いだった。でも若い彼の姿は美しかった。

話すことは訳がわからないし、度々不思議なことを言う。何より素性が明らかになっていないように思え、姉がなぜ彼を信頼し、ボーエの町でも過ごしていたのか、妹にはわからなかった。

「それから……気になることがあります……」

白ひげの男は言って、不安げに眉を潜める。

「いいえ、よくなってからでも構いません、急いで聞くこともありませんし……今は体を良くしてくださいね、あなたの体なのですから」

言うと、男は部屋を出ていった。背中には大きく刺繍が施され、縦に引かれた金糸の柱は杖、柱の足から両端に伸びるのは、生きた葉を思わせる翼である。

ゆっくり天井に目をやると、窓から差し込む光が、人の形に切り取られていることに気がつく。

窓の外には誰もいなかった。人影は悲しげに窓枠から逃げていく。少女は幻のように見えた人影に目を閉じた。

教会に集まった人は、互いに合った人のみだった。それにしても、いつになく人がたくさんいた。

神父は教会の入り口を閉めると、そこを光の鎖で封じ、まっすぐ祭壇へと絨毯の上を歩いた。

「皆さんご存知の通り、外にはたくさん兵士や、王に従属するようになった市民が、私達のような人間を探してさまよっております」歩きながら彼は言った。

ノワールは教会の一番端に座って、目の色一つ変えずに、神父の話すことを聞いていた。

ここ数日ずっと、暗いように見えていた空は、その日一層暗かった。

「今、かつて存在した聖域反対派の力が、大きくなり……一種の禁忌とされていたはずの聖域反対は、王の新しい命令により、書き換えられたのです」

少年の隣に座る男が、舌打ち混じりにぼやく。

「全く、いやらなっちまうぜ……」

細身の、少し年のいった男の声に、ノワールは目を向けた。足を揺らす音がさっきからうるさいと思っていたからであって、特に男の言うことは誰でもそう思っているようなことだったので、どうでもよかった。

「……何だよ」

男は視線に気づくと、少年をにらんだ。神父にも、あたりにも、聞こえないくらい小さな声で、二人は話す。

「おじさん、ブランシュの隣に住んでる……」

ノワールが言うと、男は不気味に笑った。

「何だ、俺のこと知ってんのか。俺もあんたのことは知ってるけどさ」

それから、男は耳元に顔を寄せて、さらに小さな声でささやく。

「あんた、あの子とは、できてたの？」

ノワールは一瞬体を震わせて、すぐに首を横に振った。

なぜ話したこともない他人にそのようなことを尋ねられなければいけないのか、彼は困惑した。

それから、教会の外から、大勢の声が聞こえる。絶え間なく続くその声は、だんだん大きくなっていくように聞こえる。

「聖域、反対！ 聖堂、反対！ 教会は古い信仰を排せよ！」

そうして、そのあとには必ず、窓に何か重いものがぶつけられた。そのたび、神父は眉をひそめ、何かをぼやいていた。

ほとんどがまじないだと思われ、教会の祭壇にずっと、羽を広げたままで妖精が座っているのも、この教会を守るために見える。

男のすぐ横にある窓が大きく音を立てた。男があげた声に、ノワールも驚いた。

「大丈夫、この教会には強い祈りの力を施しております。少しの衝撃に壊れるほどやわではありますまい」

幕を下ろしたままの窓の奥ではたくさんの民が、教会の中にいる彼らを引き込もうとしている。

「だが、じいさん、ここでいつまでもこうしていて、何になるって言うんだ？ 俺達はもう一晩こうしてるんだぞ」

ノワールの隣からそんな声があがった。

ずっとそうしているわけにはいかないことくらい、誰にでもわか

った。

ただ、どうしようもないのである。

「こうなったからには、俺達でどうにかするしか、ないじゃないか」とたんに、教会の一番前に座っていた若い男が言った。立ち上がり、辺りを見渡す。

「男も少くない、ここを反乱軍の基地にしたらいじゃないか」神父の咳払いが聞こえる。

「何を言いますか……私達は反乱軍などではありません。誰もが聖者でありますよ、力を手に天に近づいたと信じる愚かな者共とは、違う領域に住むのですよ」

教会に逃げ込んだのは、そこにいるたくさんの人だった。

王宮に従わない者は全て、幽閉された。

一晩のうちに、町は刃を持った兵士で埋め尽くされ、それは軍国の再来を示していた。

王はもう一度、剣を握るようにと、国民に伝えた。

神父はそれには答えなかった。

「人が争ったのは、まだ近い昨日であります。私達は忘れてはいけません。自然は争いを望んではないのでありますから」

教えを受けると、若い男は静かに座った。

「誰もが不安です、この聖堂のすべての人が、迷っております。しかし、私達には祈りというものがあるのです。今まで守り続けてきた力が、私達を救うのです」

「守ってきた力とは、神父様、一体どのようなものなのでしょう……それは、あの兵士達が持っているやりや剣に打ち勝てるものなのでしょう」

婦人が言った。

守ってきたものの、それはノワールにとっては、あまりにも簡単なことだった。

「ええ、勝てますとも、いかにして負けることがありますか。人の作り出した刃など、自然にとっては小さなちりであります」

それから、神父は、それまでの声からすっかり調子を変えて、語りかけるように言った。

「皆様は、あの優しかった王様が、あのようになられたと、本当に思いますか」

少なくとも、ノワールはそうと思わなかった。

そこにいた、誰もがそうなのだと、彼は思っている。

今、彼の手元にある伝書も、そう語っている。

「俺は、王様は何かにつけこまれてるんじゃないかと思うんだ」

気づくと、彼は隣の男にそう口を開いていた。

「王様は何か、魔界の民と手を組まなきゃいけないようなことがあるんだよ。それで、きつと、悪魔かなんかにだまされてるんだ……」語るじつと眺めて、隣の男は静かにうなづく。

「お前、よく考えてるんだな。しかし、だ。悪魔って言い方はあんまりよくねえよ。そりゃ昔の言い方だ」

「昔？」

男は少し妙な表情でうなずいたあと、ふところから紙切れを取り出して、ノワールに見せた。

「これは……」

ノワールはまじまじと視線を注ぎ、息をのんだ。

紙切れには、目玉をそのまま写したかのような、本当にそこにあるような風景が描かれていた。

ブランシュでもこんなに正しく描けないだろう。彼はそう思うともっとよく見たくなって、半ばひったくるように、その絵を手にとった。

「すごいよ、おじさん、これ……これじゃ、本物じゃないか」

よく見れば見るほど、そこに新しい世界が広がっているようで、不思議だった。

彼は裏から透かしてみたり、少し擦ってみたりしたが、やはり本

物のようだった。

男は自慢げに笑った。

「すげえだろ。そいつは映し絵って……昔々のもんなんだよ」
男は紙切れの裏にある小さな文字を、指でなぞって見せた。

「ヴォアザン……」

「俺の名前さ、ヴォアって言うんだよ」

その文字は色あせた紙切れと同じようにあせている。

「じゃあ、この絵、おじさんが？」

「まさか。それは人の手にゃ描けないよ。ただ、今はなかなか珍しいもんだけどさ……昔はよくあったんだよ、こういうのが」

「ふうん……で、悪魔の話は？」

ノワールの問いかけに問いかけに、ヴォアザンは静かに語り出す。

「こいつはな、まだ魔族の全てを悪魔って呼んでいたときのもんなんだよ……」

器の中の小さな泡がはじけて、ルージュは目を閉じた。

「大丈夫かい」

夫の声に、ルージュはまた、目を開ける。そしていつもと変わらない様子で、笑顔を作った。

「私は近頃……疲れているようで……毎日、毎日、あの子達が心配なのに……」

手に握られた手紙には、読めない文字が書かれていた。

毛糸が絡まったような文字が続き、便箋の中程で、途切れている。墨は指の形ににじみ、とても文字には見えなかった。

ただ、その手紙がやつと彼女のもとに正しく届いたのは、誰かが宛名を代筆したからに違いなかった。

「この字、ブランシュにそっくりで……ルージュ・カンバスって……」

妻は夫の上に崩れ落ちた。

「じゃあ、あの子達は、あの宿に？」

「ええ、きつと……でも、私の母はもう、年を取りすぎていたようです。もう、孫の顔でさえも……覚えていなかったのでしょう」

しばらく、何も考えないようにして、またまぶたをおろし、母から届いた手紙を握っていた。

「私が届けておくからね、おばあちゃん」

小人は、老婆が寝ている間に、老婆の娘からの手紙の返事に、宛名を書いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5262v/>

極楽鳥花の花言葉

2011年12月19日21時55分発行